# 唐朝妖異譚①――王氏の余慶

中国唐代末の話である。

柳州北西部の村に塩の取引で多少の財をなした張という一家があった。張家には三人の娘がいた。

姉二人は美人の誉れが高く、年頃とあってひっきりなしに縁談が舞い込んだ。三省の長官と姻戚関係にあるという身分の高い家からも望まれたが、気位の高い娘たちはなかなか首を縦に振ろうとしなかった。村人たちはあの母娘なら、宰相の子息でも不足を言うかもしれないと噂しあったものである。

しかし、ここでの主人公はその姉たちではない。下の姉と四つ違いの末娘で

ある。名を王氏という。
若い頃の王氏は牛蒡のような娘だった。手足が細く痩せて色浅黒く、顔もお世辞にも美しいとは言えなかった。張家を知る者たちによれば、上の二人とは比べるのも愚かしいということになる。
それもそのはず、王氏と姉たちとの間には血のつながりは一切なかった。
幼いうちに次々に両親を失った王氏は、亡父の商売仲間だった隣村の張家にもらわれていったが、この時、残された相当の土地や財産はすべて張家の支配するところとなった。
張家に入ってからの王氏の生活は案の定幸福なものではなかった。養母の呂氏は外では美人でやり手と評判だったが、内では傲慢な暴君だった。二人の姉はといえば、母親の美貌ばかりか気質までそっくり受け継いでいた。
この母娘にとって王氏は娘でもなければ妹でもない。従順で安上がりな下女

にすぎなかった。気弱な主人の梨君はそんな女たちの言うなりだった。
呂氏は何かにつけては継子いびりをし、時にはひどい折檻もした。おかげでからだには生傷が絶えたことがなかった。
もっとも幼い時分から、こうした境遇にあった王氏は耐えることには慣れていた。涙も乾き、笑顔も忘れたようだったが、煤にまみれて黙々と働いた。
だが、そんな辛抱強い少女にも、我慢のならないことが一つだけあった。
それは機織りのことである。この村は古くから機織りの村として知られ、ここから織り出される絹織物の綾は、柳州の至宝として都の富貴な人々に珍重されていた。
村の娘たちはみな幼い頃から機を習う。上の二人も祖母から技を習い、今では村で一、二を争う織り手として、美貌に華を添えていた。
この村で機を使えないということは、嫁ぎ先がないと言われるのに等しかっ

た。ところが王氏は十二歳になる今も、まだこの技を身につけていなかったのである。習う機会を与えられなかったからだが、これは村の掟に照らしてもまったく理不尽なことだった。王氏の訴えを聞いて不憫に思ったある老婆が指南役を買って出たが、口出し無用とばかりに撥ねつけられてしまった。その晩、哀れな娘は告げ口を疑われて、またこっぴどく叱られた。

そんな境遇に大きな変化が訪れたのは、彼女が十三歳になったばかりのある夏の日のことである。

この日の昼近く、一人の僧侶が村外れに現れた。その身なりたるや、ぼろぼろの袈裟に足は裸足という乞食坊主そのもの。街道沿いのこの村に托鉢僧は珍しくはないが、彼が村人に忘れがたい印象を刻んだのはその風貌だった。

まず目につくのがやけに上下が尖った長い顔である。それが地黒の肌とあいまって、畑で獲り忘れた瓜を思わせた。

造作もいちいち特徴的だった。黒目がちの大きく丸い眼。その間に高々とそびえる二段鼻。その下には方向違いの二本の出っ歯と分厚い唇があった。のちにこれを西域に住まう異人のようだったと評する者もあった。

あとは首がやけに長く、喉仏が卵を呑んだようにふくらんでいるのも異様だった。その喉仏を斜め前に突き出して歩く様はさながら大きな鶏をおもわせた。

年は若くも、老いているようにも見えたが、脚は健脚らしく、早足でつんのめるように歩いて、やがて村にただ一軒の茶店に入って行った。

「もし……」

と、旅僧が店先から声をかけた。奥で饅頭をふかしていた老主人は一瞬ぎょっとしたように顔を上げたが、僧と知るとすぐに布施の用意をしようとした。それを押しとどめるように僧侶は続けた。

「ちとおたずね申すが、この村に十三になってもまだ機の技を身に着けていな

い娘はりませんかな」
「さあて、この村にそんな娘がおりましたか……」
主人は首をかしげたが、奥から出てきた小太りの女房が、それは張家の王氏ではないかとおしえた。
この答えを聞いたとき、主人は僧侶の喉仏がびくっ、と動くのを見のがさなかった。「やはり」と僧侶はつぶやくと、丁寧に礼を言って立ち去った。
旅僧が張家の門前に現れたのは、それから半刻余りしてからだった。どこからか聞こえる「うそつきおーし、うそつきおーし」という子供のはやし声を聞きながら、僧は平然と門を抜け、少女がせわしげに立ち働いている裏庭に入った。
王氏はちょうど竈にくべる薪を運んでいるところだった。坊主はその様子を遠くからしばらく眺めていたが、やがてすたすたと近づいて行った。

「一人でたいへんだな」
声をかけられた少女は胸をつかれたように振り返った。もともと色黒の王氏の顔は煤でいっそう黒くなり、今やちっぽけな消し炭のようだった。
王氏は僧衣を見ると安心したのか、仕事にもどりながら、
「坊様はどこからきたのですか」とたずねてきた。
「わしか？　わしは遠いお山から来たのじゃ。そなたはほかの娘のように機は織らないのか？」
「誰もおしえてくれないから」
「母上がおるではないか？」
両腕にたきぎを抱えながらもう一度振り返った娘は悲しそうに首を振った。
「だったら、おれが教えてやろうか」
「坊様は機を織れるのですか」

王氏の目がとたんに輝いた。近所の者が見れば、それが哀れな少女が久しく見せたことのない笑顔だとわかっただろう。

「もちろんだとも」

「でも、だめ」

また笑顔が消える。

「なぜだ？」

「お養母さんに叱られます」

僧侶は首を振り、おれがうまく話してやるから心配するなと言って、茶店で買った饅頭を娘の手に握らせた。

◇

翌朝、王氏は養母から一つの用事を言いつかった。新しく山寺に来た住職に昼食を届けろというのである。

山寺という言葉を聞いたとき、王氏は泣きたくなった。寺といってもそこは前の住職が出奔してからこの方ずっと空き家で、荒れるにまかされていた。この物寂しい荒寺が彼女は大の苦手だった。どうしても近くを通らねばならないときなどは、目をつむって走り抜けたものである。そんな少女を風がどこまでも意地悪く追って来た。

しかし養母の言いつけには背けなかった。

急な山道を重い足取りで登り、傾いた山門が見えると、その下に一つの影があった。

「あっ、坊様」

仁王立ちで王氏を見下ろしているのは、なんと昨日の瓜坊主ではないか。

「どうだ、おれの言ったとおりになっただろう」

にわか住職は腰に両手をあて、大きな口を化け物のように開けて笑った。

瓜坊主がここに住み着くにあたっては、村の主立った者たちに相当の鼻薬を嗅がせたようだ。王氏が昼食の賄いを言いつかったのも、その薬効だったのだろう。

運ばれてきた昼飯をぺろりと平らげると、瓜坊主は僧坊の裏手にある朽ちかけた納屋に王氏を招きいれた。引き開けられた戸の奥には、どこから運び入れたものか、古びた機が据えつけられていた。それは王氏がそれまで村で見たどんな機とも違っていた。

戸口に立ったまま呆然となながめていると、坊主はまた大声で笑った。

「そんなに珍しいか？　なに、機なぞなんでも同じだ」

こうして二人の奇妙な師弟関係が始まった。

瓜坊主の教え方は一風変わっていた。いや、それを教え方と言ってよいものかどうか。

機の前に座った坊主は、王氏を傍らに座らせると、こんなことを切り出した。
この抒と機が織るのは織物ではない。綾でも錦でも綺でもない。紗でもなければ羅でもない。機が織るのは経糸と緯糸の織り成す物語であり、すなわち宿命だ。それは織ろうとしても織れず。だからおまえは織らずに織らなければならない。
「わかるか？」
瓜坊主の言葉が何かの呪文のように聞こえた王氏は、「わからない」と、小声で答えた。
「まあいい、すぐにわかるさ」
それから坊主は織り出した。いやむしろ語り出したというべきか。王氏が一度も聞いたことのない遠い異国の物語を……。
黄金色の鳥に夢を盗まれた王女の物語。白い獅子に育てられた隻腕の剣士の

物語、動く砂に呑み込まれた虹の王国の物語……。
瓜坊主の物語は謳うでもなく、語るでもなく、あたかも恒河の砂が流れるがごとく果てしなく続いた。その間、抒は坊主の手を離れ、妖狐にも似て織り台の上を縦横無尽に飛び回るのだった。
気がつくと、機からは見たこともないような不思議な文様が織り出されているではないか。王氏はその美しさに陶然とした。
一日目も二日目もそれだけで終わった。機をおしえてくれないのは不満だったが、終わったあとは何やら全身が熱く心地よく、王氏は幸せだった。
瓜坊主の話は何日か続いたが、そのうち話も尽きたのか、今度は王氏の話を聞かせてくれとせがんで来た。
「話なんかありません」と、王氏が困ったように答えると、
「そんなことはあるまい。崖の上の鳥の巣はどうだった」

なんで坊様が鳥の巣のことを知っているのかと不思議に思ったが、それをきっかけに、小さな口から堰を切ったように言葉が溢れ出した。

崖の上で発見した鳥の巣のひなが孵るまで見続けたこと、かわいい五匹のひなを見て、たとえようもなく嬉しかったこと、亡き母様からいただいた柘植の櫛のこと、裏山から見た悲しいような秋の夕日のこと、姉たちに捨てられた花嫁人形のこと……。

とりとめのない少女の話を、瓜坊主はどこからか取り出した筆と紙ですばやくしたためていった。書き終えるごとに、紙は機に吸い込まれ、またも美しい織物が織りだされていくのだった。

王氏の話が続く限り、瓜坊主の筆も果てしなく紙上を舞い続ける。そして機もまた……。

そのうち王氏は、自分が織物の美しさに酔っているのか、坊様の話に酔って

いるのか分からなくなってきた。ついには何を語っているのかさえ判然としなくなった。

王氏は来る日も来る日も寺に通い、物語を語り、聞き続けた。瞬く間に一週間が過ぎた。

瓜坊主は帰りがけには、必ず何がしかの銭を持たせてくれた。王氏はその駄賃の半分を誰にも見つからない山中の祠に隠し、残りを養母に渡した。

「なんだ、これっぽっちかい。ずいぶんとしけた坊様だね」

呂氏は昼食の賄い代をたっぷり貰っていることも忘れて毒づいた

「この娘は嘘つきだから、きっとどこかに隠しているにちがいないわ」

下の姉がにくにくしげに言うと、上の姉も同調する。

「この間も鳥のひなが孵るところを見たなんて、嘘をついたんだから」

◇

山寺に通い始めてから十日ほど経ったある日、王氏は奇妙なことに気づいた。それは機のことをまだ何も教わっていないことだった。あの日の約束は一体どうなったのか……。

「坊様はいつになったら機をおしえてくれるのですか」

翌日、小屋に入るなり疑問をぶつけると、瓜坊主は大きな目をグルっと回しながら笑った。

「機の織り方か。それなら、もう習っているではないか」

「でも、まだ、わかりません……」

「さて、そうかな。おまえは姉さんたちが織っているところを、小屋の隙間から覗いていただろう」

言われて王氏ははっと思い出した。養母の目を掠めては、姉たちの仕事ぶりを盗み見ていたことを。そして仕事中に、あるいは寝床の中で、何度も頭の中

で反芻していたことを。だから手順はもうすっかり頭に入っていたのだった。
「わしは今、その先をおしえているのだ。もう少し辛抱して待つがよい」
瓜坊主が忽然と村を去ったのは、はじめて茶店にあらわれてから一月ほどしてからだった。
その日も王氏は、残飯をかき集めてつくった弁当を手に小屋に出かけて行った。このごろは毎日が楽しく、仕事をしていてもつい歌が口をついて出る。その気持ちが姿かたちにもあらわれるのだろう。肌の黒さは相変わらずだが、笑ったときなど、娘らしい輝きが見るものをはっとさせることがあった。ところが今日にかぎって、その顔からは笑顔がすっかり消えていた。
実はこの日、彼女は一つの決意を胸に秘めていたのである。
不思議な坊主と修行を続けるうち、王氏はいつしか一つの疑いを抱くようになった。この坊様こそ、母様の仰っていた父様ではないのか。

臨終の床に幼い王氏を呼んだ母は、娘に機をおしえられないことを詫び、苦しい息の下から思いがけない話をした。

「よくお聞き王氏。おまえには父様は死んだと話していたが、実は父様は生きていらっしゃる。おまえが生れるとすぐ、道士の修行のために遠いお山に出かけられたのだ。修行が成就すれば必ず帰ってきて、おまえを幸せにしてくれるに違いない。だから、それまでは何があっても強く生きていかなければならないよ……」

それは死にいく母親が、残される娘の行く末を案じてついた罪のない嘘だったかもしれない。しかし母の言葉は王氏の支えとなり、希望となった。

張家にもらわれてきてすぐ、王氏はこの話を得意気に披露した。すると非情な養母は言下に否定し、少女の夢を嘲った。

「何寝言をいっているんだ。いいかい、おまえの父親は鶏泥棒をして村を追わ

れた悪党なんだよ。大方、今ごろはどこかで野垂れ死に違いないさ」
それを聞いた姉たちは「うそつき王氏、うそつき王氏」とはやしていじめぬいた。以来、誰にも打ち明けたことはなかったが、父の生存は確信となって彼女の心に生きていた。
その父様が山から、機を教えに戻ってきたのではないか。坊様は父様なのだ。だって、遠いお山から来たと、自分で仰っていたではないか。
しだいに高まる思いを、しかし話せばこの幸せな時が壊れてしまうようで、少女は必死に押し殺していた。今日こそは思いを打ち明けて、疑念を晴らすのだ。
「坊様、坊様……」
王氏が外から声をかけると、いつもは本堂の陰からにゅっと突き出される長い首が、今日にかぎっては返事もない。不安な思いで納屋の戸を引き開けた王

氏の口から、あっという声が漏れた。中はもぬけの殻。あの古びた機も、奇妙な文字を連ねた紙も、織りためた綾や綾もすべて跡形もなかった。

坊様、坊様と叫びながら、王氏は本堂や境内を探しまわった。見つからないと、山中を獣のように駆け巡ってその姿を求めた。

どのくらいたっただろうか。疲れきって納屋に舞い戻った王氏は、床の上にポツンと置かれているものに気づいた。それはこのひと月の間、つねに坊様の手の中にあったあの抒だった。

坊様にもう会えない。その悲哀は胸に満ち、王氏はボロボロと涙を流しながら山道を下った。

機をおしえてもらう約束が、結局、機には一度も触らせてもらえなかった。今、坊主がいなくなってみると、すべてが長い夢だったような虚しい心地がした。振り返れば、山門も僧坊もあの納屋も皆、霞のごとく消えてしまうのでは

ないか。
祠の前まで下ってきた王氏は、立ち止まって中に手を差し入れてみた。すると、たしかな手当たりがある。取り出した銭を数えてみると、いつのまにか相当な額になっていた。その銭の重みと抒の手触りだけが短い師弟関係のあかしのように思え、王氏はそれを両手で握りしめた。
帰宅した王氏が坊主の失踪を告げると、呂氏は鼻先でフンと笑った。そして、どうせそんなことさ、と吐き捨てた。
「あんな乞食坊主に居つかれては、村のためにならないからね」
「王氏、王氏、何をしているの。早くここを片づけて！」
離れから姉たちの厳しい声が届いた。
こうしてその生活は元の過酷さに戻っていったが、数日が過ぎる頃、王氏は何か不思議な感情が身内に芽生えているのに気づいた。しかし、それが何かは

王氏自身にもわからなかった。
しばらくして養母が姉たちを伴って一夜家を空けることがあった。その晩、下女たちが寝つくのを待って、王氏は機小屋の戸を開けた。機の前に座ると、抒を握り、おのれの心の動きを確かめるように足を践みこんだ……。
そして感情は確信に変わった。

◇

「おまえ、わたしたちの留守をよいことに何をしていたんだい」
翌日の夕方、台所で立ち働いていた王氏の耳に呂氏の怒声が響いた。
「知りません」
「知りません、て？　じゃあ、これは一体なんだ」
その手には、この村ではついぞ見かけない見事な綾織物が載っていた。
「おまえの部屋から出てきたんだよ。なんで知らないことがあろうか。どこで

盗んだんだ」
王氏が小屋に入ってしばらくして、下女の一人が厠に起き、運悪く綾を抱えて庭先を忍んでくる王氏を見かけてしまった。この下女が忠義ぶって昨夜の出来事を報告したのである。
「この家に泥棒猫を飼っておいたおぼえはないよ」
呂氏はなおも厳しく問い詰めたが、答えがないと、怒って棒で激しくたたいた。それでも少女の口を開かせることはできなかった。
「おい、張さんいるかい？」
その日の午後、張家の玄関先に一人の男が息せき切って駆け込んできた。張家の娘たちの織物を一手に引き受けている町の織物商だった。
「おお、奥さん。娘さんの織物を見せておくれ、さあ、早く」
商人は呂氏の顔を見るなり、切り出した。

上の娘たちが織りたての綾をいそいそと運んでくると、ひと目見て首を振った。
「いや、違う。こんなものならいつも見ているさ。ほかの、新しい織だ。ほれ、これと同じの」
商人は持参した織の端切れを示した。
姉二人は狐につままれたようだったが、母親の顔色が見る見る変わった。それは呂氏が王氏に突きつけたのと同じ手の綾だったからである。その様子を見た商人がさらに問い詰める。
「隠したってだめだぞ。さては、わしを差し置いてよその店に扱わせるつもりだな。李のところか、周のところか、それとも孫のところか……」
「はて、どうなさったな」
商人の怒声に驚いた主人の梨君が奥からあらわれた。

「おお、ご主人、いいところへ。まさかあんたまでわしを愚弄したりせんだろうな」

主人の温顔を見て、ようやく落ち着きを取りもどした織物商が最前のいきさつを語り始めた。

それによれば今日の昼過ぎ、汚い坊主が店にあらわれて、珍しい綾織物を売りたいと申し出た。どうせゆすり、たかりの類と思い、家人に命じて追い返そうとした。すると坊主は脇に抱えていた織物をさっと店先に広げた。

それを見た商人は腰を抜かさんばかりに驚いたという。

「わしもこの商売を三十年近く商っているが、あれほどの綾はまったく見たことも聞いたこともない。天女の羽衣もかくやとはあのことだろう。『あなた様がお織りになったので」とたずねると、坊様は笑いながら、『拙僧ではない。張家の娘じゃ。張家の……』と、答えなさったのだ。嘘ではないぞ。その証拠に、

ほれ、ここに端切れがある」
「その坊様はどちらにいかれましたか？」
どこからか問う声がした。振り向いた商人の口から、あっ、という声が漏れた。張家との附き合いは長かったが、末娘の言葉を聞いたのはこれが初めてだったからである。
「こんなところで何をしているの。早く庭の掃除をすませてしまいなさい」
商人の手前、呂氏の声はいつもよりやさしかった。
「その綾は、わたしが織りました」
「何を馬鹿なことを。おまえなどの出る幕ではありませんよ」
商人が本当か、と質すと、娘はまっすぐ見返しながらうなずいた。
「またいいかげんなことを。おまえなどに織れるわけがないでしょう」
「織れるというのだから、織らせてやればよいではないか」

女房の声を遮ったのは、いつになく毅然とした梨君の声だった。その気迫に驚いた呂氏が言葉に詰まると、商人が引き取るように提案した。
「そうだ。織らせてみればわかることだ。だめだったらその時に叱ればすむさ。なっ、奥さん、どうだい。そこまで言うのなら、娘さんに織らせてみたら」
「では、姉様の機を一晩だけお貸しください」
その晩、食事の片づけが終わると、誰も入らないよう言い残して王氏は一人機小屋に引きこもった。
その後ろ姿に姉たちが憎々し気な言葉を投げつけた。
「どうせ王氏になんか、織れっこないのだから」
「もし、できなかったら、今までで一番ひどい目に会わせてやりましょうよ」
姉たちは、どうやって妹をいじめようかと夜更けまで計って、飽きることがなかった。しかし翌朝、その期待は物の見事に裏切られた。王氏が機小屋から

現れたとき、その両腕にはあでやかな一匹の綾が載っていたからである。
「これからは娘さんの綾は一切、このわたしに商わせてくださいよ。奥さん、ご主人。まったく、あんた方はとんでもないお宝を得なさったぞ」
綾の完成を待ちかねて早朝から詰めかけていた商人は、興奮に顔を赤らめて一気にそうまくし立てた。

◇

王氏の織物が織物商の店頭に並べられるや、たちまち村じゅうの評判となった。やがてそれは破格の高値で取り引きされるようになった。
もっとも商人から支払われた代金は、大半を養母が横取りしてしまったため、王氏の手元に残ったのはごくわずかだった。それでも、祠にためていた銭と合わせて機を買う頭金ぐらいにはなった。そこで王氏は商人にたのんで自分の機を造ることにした。

村一番の織り手がどんな機を造らせるか。村人の耳目はこの一点に集中したが、小屋に運び込まれたのは、村ではありふれた機だった。
「見たか、おまえさん」
「ああ、見たとも」
「織りは、な、機のよしあしではないぞ」
「まったく、まったく」
村人たちはかえって口々に誉めそやした。
「奥さん、よくあそこまでお育てなさった」
「孝行な娘さんをもって本当にお幸せですね」
こうして王氏の評価はさらに上がったが、反面、呂氏の思いは鬱屈していった。
呂氏がどうにも我慢がならないことの一つは、王氏の評判が上がるにつれ、

実の娘たちの評判が急落したことである。かつての村一番の織り手たちのことは、いつしか人々の口の端にも上らなくなっていた。

二つ目は、王氏が機を織っている姿を他人はおろか、自分にさえ見せないことだった。つねに一家の支配者として振舞ってきた呂氏には、あるいはこれが一番不満だったかもしれない。しかし呂氏にとって不都合なのは、王氏の背後には有力商人の意向が働いていたことである。

人の欲望は禁じられることでかえって膨らむもの。呂氏は技の秘密を考えては、悶々と眠れぬ夜を過ごした。

王氏ごとき小娘が、にわかにあれほどの技を身につけられるはずがない。きっと、何か秘密があるはずだ。技でなければ、道具だろうか。機には取り立てて変わったところはないようだから、とすればあの抒か。

一夜、どうしても欲望を抑えがたくなった呂氏は足音をひそめて機小屋に近

づいていった。すると、何もないはずの地面につまずいて、額と鼻をしたたかに打った。そのうえに足首をひどく挫いてしまった。そんなことが一度ならずあった。母親の臆病さを笑った姉たちも、相次いで同様な目にあった。以来怖れて誰も近づかなくなった。

ところで王氏の織物は美しさだけで評判になったわけではない。買い求めた客の間から、さまざまな奇蹟の噂が立ったのである。

王氏の布で石ころを包むと、ことごとく珠になった。獲れた魚を包めば夏の盛りにいつまでたっても腐らない。布団の上に重ねたら子供の病が治った。これはおそらく、早くに両親を失った娘が養父母に孝養を尽くしたおかげにちがい。こうしてその布はいつしか「王氏の余慶」と呼ばれるようになった。

ちなみに余慶とは、長年の積善がもたらした福といった意味である。

王氏の布を扱う商人のもとには、福を求める善男善女がわれもわれもと押し

かけた。
この頃村人の中に王氏を誹謗する者があらわれた。
あれほどの綾、習い立ての小娘が急に織れるものではない。きっと妖怪や物の怪のたぐいが取りついたにちがいない。そういえばあの娘は先ごろ怪しい坊主がいついた山寺に通っていたとか。大方、あの者が物の怪だったのだろう。いや物の怪に見込まれた王氏自身もその血筋なのかもしれない。
それに機小屋から気味の悪い物音や声が聞こえると、雲が怪しく動き、時ならぬ突風が戸をたたくとか。それをおそれて犬や豚が鳴きやまぬ。魑魅魍魎と結託した娘をこのまま放置しておけば、いつか村に大きな災いをもたらすにちがいない。
噂は王氏の技に嫉妬した者の作り事だったが、それは怪力乱神に対する畏れと呼応して、たちまち村人の心をとらえてしまった。ついには手に手に得物を

とって、張家に押しかけかねない勢いになった。
「もう、お前をここに置いておくわけにはいかないよ。さっさと荷物をまとめて出ておいき」
呂氏はいつにも増してきびしい口調で末娘を責め立てた。
二人の姉も「お前のせいで、わたしたちはお嫁にもいけない」とかわるがわるなじった。
かくして王氏の前には大きな暗雲が立ちはだかることになった。しかし瓜の坊様に出会って以来の幸運はまだ続いていた。村人が押しかけようとしているそのさ中、この春就任したばかりの県令（県知事）が張家を訪れたのである。
この県令は名を李宗といい、進士試験の出身者でなかったため出世は遅れていたが、温厚、実篤の士として聞こえていた。また文官にしては珍しく武を好む硬骨漢でもあった。

不思議な綾の噂を聞いた李宗はその真偽を確かめるべく、ひとり愛馬を駆って立ち寄ったのである。

主人は大いに恐縮し、早速酒肴の支度を整えようとしたが、李宗はそんなことより、早く王氏の織物を見せてくれとせがんだ。

やがて床に広げられた織物を李宗は声もなく見つめていたが、次には王氏が織っているところを直に検分したいと言い出した。すると家人の予想に反して、王氏はこの申し出をすんなり受け入れた。

「県令様のお話をお聞かせくださいませ」

機の前に座った王氏は、李宗に笑顔を向けながら何か話をとせがんだ。県令は意外な言葉に驚きながら、さてと、首をひねった。

「お母上様はどのような方ですか。きっとお優しいのでしょうね」

「母御か。わしの母御は先年亡くなっておる……」

「それは失礼をいたしました」
「いや、よい。わしの母御という人は、な」
李宗は優しかった母との思い出を語り出した。それを聞き取りながら、娘はいつのまにか取り出した筆を握り、何やら紙に文字を書きつけだした。いや文字と思ったのは模様とも文字ともつかぬ怪しい文様であった。
李宗が奇なことと見ていると、やがて王氏は書き上げた紙を台の上に置いた。ついで抒を握ると、はじめはゆっくり、しだいに速く抒を使い出した。杼の動きにあわせて、たて糸が何かに引かれるようにすばやく動く。それはまるで見えない天女が、王氏と呼吸を合わせて糸を引いているようでもあった。
さらに奇異なのは機と杼の動きに合わせるように、紙に描かれた怪しい文様も変化することだった。
動きはますます速まり、やがて手を放れた抒はもはや自らの意志をもったか

のように糸の間を飛び回った。県令は傍らに立ったまま、その技をまんじりともせずながめていた。

永遠の時が過ぎたかと思われた頃、抒は静かに動きを止めた。大きくため息をついた県令は王氏に向かってこのように忠告した。

この後も、そなたの技を決して他人に見せてはならぬ。見れば、必ず鬼神が宿っていると触れ回るものがあらわれるだろう。そうなれば、そなたに害が及ぶ……。

張家を立ち去るにあたって県令は、王氏の技は国の宝であると称え、機のことについては何事も王氏の思いのままにと言い置いていった。

かつての輝きに影が射しているとはいえ、大唐の威光はいまだ村々に浸透していた。そのお墨付きを頂戴したとなれば、あえてケチをつけるものなど出ようはずもない。こうして村の騒動も自然と収まっていった。

王氏に縁談が舞い込んだのはそれから間もなくのことだった。相手はほかでもない李宗だった。

二年前に妻を亡くして以来、李宗は度重なる周囲の勧めも断って独り身を通していた。最初の出会いから心引かれるものを感じた県令は、少女の行く末を案じる気持ちもあって後妻に迎える決意を固めたのである。

一方、王氏はこの年十四歳の春を迎え、顔の色も白くなり、どことなく娘らしい風情が漂い始めていた。彼女は予期していたかのようにこの求婚を受け入れた。

婚礼の日が近づいたある日、王氏は養父に呼ばれた。この養父は気弱だが心やさしく、妻にかくれては王氏によくしてくれていた。王氏が座ると、養父は決心したように話を切り出した。

「ずいぶん迷ったのだが、よい機会だから話すことにするよ。じつはお前の父

さんのことだが、な。亡くなったお母さんのいうとおり、まだどこかで生きているかもしれない」

養父の思いがけない言葉に王氏は身を固くした。

「おまえの父さんは真面目な働き者で、商売仲間の受けもよかった。ただ、ちょっと変わったところがあってな。機が大好きだったんだ。腕も大したもので村の女は誰もかなわなかった。でもそれに満足できなかったのか、おまえがまだ腹の中にいるうちに修行の旅に出てしまったんだ・・・・・」

その間に王氏が生まれた。妻は夫の帰りを信じて待ったが、一年たち、二年たっても帰ってくる気配がない。八方手をつくして捜したが、遂に手がかりはえられなかった。しかたなく死んだものとして葬儀を出し、女手一つで王氏を育てたのだという。

養父の話は王氏の心に希望の灯をともした。

やはり父様は生きていたのだ。母様の言葉は嘘ではなかった。わたしはうそつき王氏などではなかったのだ。

それに父様は機が大好きだったというではないか。だとすれば、ひょっとしたら・・・・・

「父様はどのようなお顔をしていましたか。あの山寺の坊様に似ていましたか？」

「山寺の坊様？　ああ、あの坊様かい。いや、ちがうよ。おまえの父親なら、わしにも村の者にもすぐわかる。おまえの父さんはな、もっとよい男だったよ。うん、そうだ、どこか李宗様に似ていたかな」

李宗という名を聞いたとたん王子の頬がぱっと赤くなった。

「父は必ず生きていると信じていましたが、これで先に希望がもてました。これまでのご恩は決して忘れません」

婚礼の前夜、王氏は養母の前にひざまずくと、愛用の杼をさしだした。
「これはこの家に置いていきます。わたしにはもう用がないものですから」
そして今日までの養育に礼をのべ、日ごろの仕打ちも忘れて涙を流した。
「おお、そうかい。今だから言うが、おまえ厳しくしつけたのも、この日を思えばこそ、だったんだよ」
おためごかしを言いながら、呂氏は内心しめたと思っていた。県令から支度金をたんまりもらった上に、こんなお宝まで転がり込むとは……。
早速、その道具を使ってみると使い勝手がよいばかりか、思い通りの綾が織れるのに驚いた。上の娘を呼んで試させると、王氏と同様に織ることができたばかりか、むしろ出来は勝るように思われた。欣喜した呂氏は早速、家人、親戚から近隣の村人までを家に招いて、その腕前を披露することにした。
さて、姉妹は代わる代わる機に向かったが、不思議なことに、今度は本来の

技量どおりの平凡な布が織り出されるばかり。それどころか焦れば焦るほど、不出来になっていくではないか。

呂氏は落胆するとともに、王氏に対する怒りがふつふつとこみあげてきた。あの小面憎い娘は偽の道具をよこして、わたしたち母娘に恥をかかせようとしたにちがいない。

王氏の機と抒はしばらく納屋の隅に捨て置かれたが、時折、夜中に騒がしい音を立てることがあった。呂氏が恐る恐る覗いてみると、月明かりの下で、機がせわしく動き、その上で抒が狐のように踊っていた。

気味悪くなった呂氏は、下男に命じて斧で機を切り刻み、織りかけの布といっしょに燃やしてしまった。その燃えかすは美しい砂となってさらさらと流れたという。

◇

養母が機も抒も燃やしてしまった。その話を張家の遠縁のものから聞かされた王氏は人知れず涙を流した。故郷からの手紙で、養母が井戸へ落ちてなくなったと知ったのは、それから間もなくのことだった。

一方、李宗と王氏の愛情は細やかだった。結婚を機にいよいよ本来の賢さをあらわしはじめた王氏は、巧みに家事を切り盛りし、よく夫を支えていた。

ところが、これと比例するように機を織る機会はしだいに減り、ついにはまったく途絶えてしまった。

夫は不思議がって、ある時、その理由をたずねた。すると夫人は微笑んで答えなかったが、なおも問うと、今は織らないが、いつかその機会もあるかもしれませんと答えた。

「何か織り残したものがあるような心地がいたしますので」

「ほう、それはなんだ」

「よくはわかりません」

筆を折ってのち、かえって評価が上がる文筆家があるように、機を捨ててから王氏の名声はますます上がった。やがて李宗の上司州刺使（州知事）を通して中書令（中書省の長官）張玄齢の耳にもとどき、その屋敷に招かれることになった。はじめは固辞した王氏だったが、夫の出世にもかかわることと思い直し、ともに長安の都にのぼることにした。

この長官は進士試験に合格したいわゆる秀才で、任官するや行政に非凡な手腕を発揮、大唐の要たる宰相職を兼任して政務に精勤していた。また四書五経に通じ、書画をよくする教養人としても知られていた。

しかし内には官僚の腐敗、奸臣、宦官などの跋扈があり、外には異民族の侵攻、軍閥の抬頭などの懸案が重くのしかかっていた。大唐の行く末を案じる中書令の悩みは深かった。

「おお、よくまいられた。さ、こちらへ」
王氏は嫁ぐ際に持参した最上の綾を捧げもって、中書令の前に進みでた。それを見た夫人や侍女たちからひとしきり感嘆の声が上がった。
「わしも長く生きてきたが、これほどの綾は見たことも、聞いたこともない。後宮の美妃たちもさぞかし喉から手が出ることだろう」
玄齢も手に取りつつ感心することしきりであった。
「ところで、そなたは近頃余り機を使わぬと聞くが、それはなぜかな」
「今は昔のように織れませぬので」
「ほう。しかし一度習い覚えた技がそのように簡単に衰えるものかの」
「わかりませぬ」
「おおかた、そなたが幸せすぎるからじゃろう。のう、県令殿」
玄齢は笑いながら末席で身を固くしている李宗を見やった。王氏の頬がたち

まち朱に染まった。
求められるまま、王氏ははじめて瓜坊主との一件を披露した。玄齢は大いに感じるところがあったか、途中何度か膝を打った。
その御坊は機織先生の仮の姿かもしれぬ。中条山に住まいおるかの先生は機の術を極めておられる。十三にして技を知らぬ王氏を哀れんで、その術を授けにきたのではなかろうか。
「しかしながら。道士の術となれば、県令夫人のみの手柄ではありますまい」
宴席の端から横槍をいれたのは、吏部侍郎の崔義玄である。
崔もまた進士試験を通った秀才で、有能ではあるが、生来の野心家だった。正義面をして遠戚の中書令に取り入ったかと思えば、権勢を誇る皇帝の愛妾の一族にもすり寄り、あるいは宦官とも通じて宮廷に暗躍していた。また道士に学んだあやしい技を使うとの風評もあり、どこか得体のしれぬ人物だった。

「いや、術のみであろうか」
反対側の席から返したのは辺境の警護にあたる劉将軍だった。
「道士も、夫人の天稟を見抜いたからこそ秘伝を授けたのではなかろうか」
質実剛健の将軍は宦官や義玄らの動きをよく思わず、李宗らに同情的だった。
「夫人の出られた村では、鬼神を操る不吉な技との噂もあったようですが」
「はっははは・・・・・」
なおもねちっこく言い募る義玄に玄齢が高らかな笑いで応じた。
「これほどの傑作、鬼神すら味方につける覚悟がなくてどうして成ろうか。早速にも皇帝陛下に献上いたすことにしよう」
中書令は王氏に数多くの褒美をとらせ、今後とも機の技をもって国富の増進につとめるようにと言い渡した。
李宗夫婦が宿に下がったあと、玄齢は劉将軍にこう漏らして深く嘆息したと

いう。
「王氏の余慶」がもたらす奇跡とは、綾の織り成す物語によるものに相違ない。精妙の域に達した道士の綾は天地の理法をあきらかにし、大国の命運をすらよく物語るという。わしにその文様が読めれば、国のためにいっそう働けるものを……。

◇

宿で休みながら、王氏はこの日の出来事を反芻していた。
中書令様はおっしゃられた。わたしが機を織らなくなったのは幸せすぎるからだと。でも、果たしてそうだろうか。今の暮らしに身に余る幸せを感じてはいるが、機から遠ざかったのは決してそのためではない。嫁ぐ前から、いつかは封印しなければならないと感じていたのだ。
習い覚えた技に夢中になっていた頃、佳境に至るとどこからか怪しい声が聞

こえてくることがあった。はっとわれに返ると、胸が早鐘のように打っている。声が自分の口から発せられたものだと気づいたのは、そんなことが何度か続いたあとだった。あの折の、自分が自分ではなくなるような感覚が恐ろしくもあり、また、不吉にも感じたのである。

人が鬼神の技を操って、なぜ無事でいられようか。

その夜遅く宿にもどった夫に、王氏は秘めていた思いをぶつけた。

「なぜ、わたくしの技を知って、なお、妻にお求めなさいました。王氏の余慶などと申しても、その実、災いをもたらす邪な技かもしれませぬのに」

「かもしれん。だが、それでもよかったのだ」と答えて、李宗は遠い目になった。

「あの頃のわしは死んだも同然だった。出世の道を閉ざされ、妻にも先立たれ、わが身の不運を嘆きながら、鬱々とした日々を送っていたのだ。そんなわしの

もとに不思議な綾を織る娘の噂が伝わってきたのは、官位を捨てて郷里に帰ろうとしていた時だった。わしは何か心騒ぐものを感じて、矢も楯もたまらず馬を駆ってその家を訪れた。庭先からあらわれたのは、思いもかけぬ芥子粒のような小娘だった・・・・」

李宗は振り向くと、妻の顔を真正面から見据えて微笑んだ。その屈託のない笑顔に妻の顔も思わず綻ぶ。

「だが、そのいたいけな娘がこの世のものとは思えぬ技を披露したとき、わしのなかにある確信が生まれたのだ。天のご加護を信じてひたすら励めば、こんなわしでも必ずや国のために働けるにちがいない、とな。この答では不足か」

王氏は夫の目を見つめながら静かに首を振った。

「では、今度はわしから聞こう。なぜ、あのときわしを機小屋に入れたのだ。義母上や義父上にすら禁じていたというに」

「あなたにお会いしたときにわかったのです。この方ならわたしの技を見ても、決して悪いご判断はなさらないだろうと。でも……」
「でも？」
「ほんとうはもっと早く誰かに見てもらいたかったのです。自分だけの秘密にしておくのが恐ろしかったから」
「王氏……」
李宗は闇の中で肩をふるわせる妻を抱きしめた。

◇

それからしばらく時は穏やかに流れていった。中書令の引き立てもあって、李宗は州刺使、節度史をへて、中央に招かれ、尚書右丞に抜擢され、さらに中書侍郎（中書省の副官）へとのぼった。長安内城でも高官の住まう一角に屋敷を構え、召使いも何人か抱えた。科挙出身者に牛耳られた役所の中で、このよ

うなことはかなり異例といってよかった。
風の便りに、嫁いだ義姉たちが相次いで流行り病に斃れたと聞いた頃、李家に娘が授かった。紅昌と名付けられたこの娘が一歳の誕生日を迎えたある日、非番の夫が浮かぬ顔で庭先の梅の花を眺めていることがあった。
「どうかなさいましたか？　何か心配事でも」
そんな夫の姿を近頃一度ならず見かけていた王氏は近寄って声をかけた。なんでもないと首を振った夫だが、その悩みの深さは背の丸みでわかった。
「どうぞおっしゃってください」
なおも促すと、李宗は苦しげな表情を浮かべながら打ち明けた。
「じつは、貴妃様がそなたの技を見たいと所望しておられる。以前から下役人を通じて再三のお求めがあったのだが、妻は機織りの技から遠ざかって久しく、ご満足のゆく技を披露することはできないと断ってきたのだ」

貴妃と言えば、近頃は玄宗の寵愛を一身に賜る後宮一の美女。一族の者はみな高官に列せられ、今では宮廷を支配する勢いを示している。仮にも断って不興を買えば、一族郎党にどのような災いが降りかかるかも知れない。夫の悩みはもっともだった。

「しかも、このたびは宮女たちの前でその技を披露せよとのことだ。お上のお立場も考えると、これ以上は答えを引き延ばせぬ」

そういって李宗は再び苦渋の表情を浮かべた。

「それにこの話にはそなたもよくぞんじておる因縁がある」

「梅妃様のことでございますか」

梅妃もまた玄宗の愛妃だった。貴妃が召し出されるまでは玄宗に寵愛され、後宮随一の美妃と謳われていた。先年、中書令より献上された王氏の綾は、この愛妾に下賜されていた。

陛下の恩愛を慶んだ梅妃は、その綾をつねに座右に置いて朝晩侍女たちとともに愛でたという。このことをあとから知って、嫉妬の炎に身を焦がしたのが貴妃である。

「王氏の余慶」は柄が虹のように千変万化し、陳皮麝香にも優るよい香りがするという。その生地でつくった服を身にまとえば、永遠の若さと美貌を保てるとか。それほどの綾であれば、天下第一の美女であるこのわたしにこそふさわしい。なぜ、梅妃ごとき醜女の手に。いや、それはなんとしても口惜しい。どうにかして奪い取れないものか……。

だが、これはいかな貴妃でもかなわぬ望みだった。玄宗の寵愛は今や刻々とおのれに移りつつあったが、であればなおさらのこと、意地にかけても梅妃が手放すはずがなかったからである。

王氏は夫の傍らで同じ花を眺めていたが、やがて振り向くときっぱりこう言

った。
「わかりました。後宮にまいりましょう」
李宗は妻の思いがけない言葉に驚いた。
「しかしそなた、このところ機から遠ざかっているではないか」
「ご心配には及びません」
「いや、いかん。人前で披露することだけは絶対にならん。あやしい技との噂が立てば、害はそなたばかりか、お上にまでおよぶ」
李宗には今回の一件についてどうしても拭えぬ疑念があった。聞くところでは、このたびの仕儀を進言したのはあの崔義玄だとか。玄齢宅の一件からして、やつが妻の織り技について何か勘づいているのは間違いない。そのうえで技を披露させて夫婦ともども失脚させる魂胆ではないか。さらには登用した上司へも牙をむく……。あの奸臣ならそのくらいのことは画策しかねない。

「その点もご心配なく。中書令様のお立場を危うくするようなまねは決していたしません」
「しかし真の技を封じて貴妃様が満足されるか」
「貴妃様も仕上がりをご覧になれば必ず得心なされるでしょう。どうか安心なさって、機を宮殿に運びこませてくださいませ」
李宗は不安をぬぐえないまま、賢い妻のこと、何かよい思案もあるのだろうと思い直し、最後はその言葉に従うことにした。
後宮の美女たちの前で、中書侍郎夫夫人が名高い「王氏の余慶」を織り出してみせる。その噂はたちまち宮廷内を駆けめぐった。
前日、宮殿の一角に李家から運び込まれた織機が据えつけられた。王氏の余慶を織り出す機がいかなるものか。機のまわりには好奇にかられた宮女たちの姿が絶えることはなかった。

そしてついに当日の朝を迎えた。
この日、広間では早朝から最高位の四夫人をはじめ、九嬪、美人、才人といった妃嬪たちが、華かに美を競いながら、織り手の登場を今や遅し、と待ち受けていた。
その頃、王氏は春まだ浅い回廊を広間へと急ぎながら、あの男の言葉を思い出していた。
前夜、宮殿の一室に泊まった王氏を貴妃の使いと称してたずねてきた者があった。玄齢邸で嫌みな言葉を投げつけたあの吏部侍郎だった。
「およそ妻たる者、夫の出世を考えぬものはおりますまい。聡明な李夫人であればなおのことと推察いたします」
部屋の中をゆっくりと歩き回りながら、佞臣はこう切り出した。
「李君は生来の才知と勤勉をもって、はたも羨むような出世を遂げられてきた。

しかしなおこの上を望むならば、権勢第一の方のご寵愛を受けるにしくはありません……」

義玄はこれに続けて、宮廷の勢力地図について語り、楊一族と昵懇になることがいかに得策であるかを説いた。そして、最後にこう結んだ。

「かような機会は、凡夫がいかに望んでも叶えられるものではない。心して務めなければなりませんぞ。それがまた李君のおためでもあります」

「もとよりでございます」

王氏が憮然として答えると、吏部侍郎はうっすらとえみを浮かべてこう付け足した。

「心してとは……、たとえ鬼神の助けを借りてでも、ということですぞ」

◇

期待と興奮に頬を朱に染めた宮女たちが待ち受ける中、やがて貴妃が三人の

姉とともに姿をあらわした。そのあたりを圧する美しさは、居並ぶ後宮の美女の顔色をなからしめると噂されるそのままだった。

息子寿王の妻だった楊玉環がはじめて玄宗の寵愛を受けたのは玉環二十二歳の折だった。先年、最愛の寵妃であった武恵妃を亡くしていた玄宗はこのときすでに齢六十半ばに達していた。

玉環に亡き武恵妃の面影を見た玄宗は「朕は天下の至宝を得た」と歓喜したという。

やがて後宮に召し出された玉環は持ち前の美貌と歌舞音曲の技によって、宮女として最高の貴妃の位にまでのぼりつめ、楊貴妃と称されるようになった。

しかし貴妃の出世は唐朝にとっては凶兆でもあった。玄宗は即位以来、三〇年に及ぶ治世で数々の善政を施し、名君の誉れが高かった。その帝国の要が貴妃の魅力に文字通り骨抜きにされ、連日、後宮に通ったあげく、ついには国政

を顧みなくなってしまったからである。
君の堕落は臣の腐敗を招き、中書令はじめ心あるものたちを嘆かせていた。
宮女にうながされた王氏は、しずかに前に進み出て礼をとった。
「ようまいられました。このところ織りから遠ざかっていると伺っておりましたので、わらわの願い、かなえてはもらえぬかと案じていました。こうしてお顔を拝見して安堵いたしました」
傾城の美女は扇を使いながら婉然たる笑みを向けた。
「過日、陛下が梅妃様に贈られた「王氏の余慶」、とくと拝見させていただきました。織りといい、柄といい、これほどの技を持つものは宮廷の繍芸所にもおりますまい。まことに天下第一の美女が身につけるにふさわしい傑作と感服いたしました」
そこまで言うと、貴妃は両脇に陣取る姉たちと顔を見交わせた。

「ほんに梅の君などにはもったいないような・・・・・」
一人の姉が宿敵の名を出すと、宮女たちの間にさざなみのような笑いが広がった。その梅の君の姿が今日の席にないのは二人の因縁からすれば当然だった。
「ところで、そなたは織っている姿を決して他人には見せぬとか。それはなぜですか」
「他意はございません。ただ、織りに気を注ぎたい一心でございます」
王氏の答えに貴妃はうなずきながらさらにこう問いかけた。
「天気を乱し、怪異な現象を招く邪な技。村ではそなたの技をこう誹謗する者もあったとか」
「ためにする噂と承知しております。本日は皆様の前で真偽を明らかにいたしたいとぞんじます」
貴妃は明快な答えに再度深くうなずいた。

「では王氏の余慶の秘伝、とくと拝見させていただきましょう」
機に向かう王氏の手にはこの日のために用意した真新しい抒があった。気息をととのえている間、すべての目がその手先に注ぎ込まれていた。やがて抒が生き物のように動き出すと、居合わせた妃嬪たちからおおっという嘆声が上がった。
驚くべき速度で織り出されていく布をながめながら、貴妃は満足の笑みを浮かべた。これでようやくあの女の鼻をあかすことができる。
「こののちは引き続き宮殿にとどまって仕上げるように」
そう言い置いて貴妃は広間をあとにした。
王氏は貴妃の命に従い、機を繍芸所の一角に移し、帳をめぐらしてそこにこもった。宮廷には怪異へのおそれと期待が交錯したが、何ごとも起こらず数日がすぎた。

機小屋にこもってから七日目の早朝、まだ暗いうちから機に励む王氏のもとに思いがけぬ来訪者があった。
「いえ、そのまま続けて……」
手を離してあいさつしようとする王氏をとどめて、夜着姿の貴妃は機台のかたわらに腰を掛けた。そうやって、懸命に抒をあやつる王氏の手もとを熱心にながめていたが、やがて思いがけずこのようなことを言い出した。
「機から遠ざかったそなたを無理矢理引き出し、技を披露せよなどと、わたくしのことをさぞ酷い女だと思っていることであろう」
「決してそのような……」
王氏は手をやすめると、恐縮して答えた。
「いえ、よくわかっています。ましてそなたは幼な子をもつ身。しかしながら、これは負けられぬ女のいくさ。わらわはなんとしても陛下のご寵愛を得たい」

王氏はもはや何も答えられなかった。
「そなたの技を見込んで、折り入って頼みたいことがもう一つあります。技芸の極みに達した織り技は占術にも通じ、その見立ては暦算陰陽五行の法にもまさるとか。以前、宮廷に出入りする道士先生からそのように伺ったことがあります」
貴妃は王氏の手を両手で取って、握りしめた。後宮の女らしくその力は弱弱しかったが、懸命な思いは伝わってきた。
「そなたの綾で陛下とわらわの行く末を占ってくれぬか。唐朝が不滅であるように、わらわは陛下のご寵愛を受け続けられるであろうか。陛下のお心を永遠に繋ぎとめることができるであろうか。のう、そなた、答えてくだされ」
権勢を誇る天下一の美女が身悶えし、かき口説くように言った。
「お許しください」

王氏は貴妃の足元に平伏した。
「わたしには道士様のような技はございませぬ」
それから一〇日余りのち綾は成った。貴妃はその出来に大いに満足し多大な褒美をとらせた。
宮殿からもどった王氏は疲れと気の緩みからしばらく寝込んでしまったが、ほどなく回復し、李家にも元の平穏な生活がもどってきた。この頃、王氏は不穏な噂を耳にした。
一夜、宮廷や後宮、あるいは主だった高官たちの屋敷に怪しい張り紙があったというのである。塀や門柱に張られたその紙には、何やら文字のようなものが書き連ねられていたが、文書を司る役人にすら判読できる者はいなかったという。
人々は不安のうちに、呪詛のたぐいか、盗賊の仕業か、はたまた謀反の前ぶ

れかと噂しあった。なかに義民の告発との意見が少なくなかったのは、楊一族の専横に不満を抱く府民がいかに多いかの証だっただろう。

不思議な文字――。その言葉に胸騒いだ王氏は、八方手を尽くして張り紙を入手しようとした。しかしすでに役人の手でことごとく処分されてしまっていた。

「そなた、この文字に見覚えがあろう」

数日後、役所からもどった夫が王氏の前に一枚の紙を差し出した。それはあきらめかけていた例の張り紙だった。奪い取るようにして紙面に目を通した王氏は愕然とした。

文字の形にはたしかに見覚えがあったが、王氏が驚いたのはそのことではなかった。以前は自在に読み書きしていたはずその文字が、今は一字たりとも読めないのである。もはやわたしは織りの奥義からここまで遠ざかってしまった

のか――。
「焼却前にひそかに抜き取らせたのだが、ひとめ見て、そなたが織りに使っていた文字だとわかったぞ」
「わたしがこれを書いたとお疑いですか」
「いや、そうではない。ただ、このところ宮廷内にはそなたの技をめぐってよからぬ噂が広まっている。そこに乗じられないかと案じているのだ」
その噂は王氏の耳にもとどいていた。王氏が機の技を使って、楊一族打倒の呪詛を行っているのではないかというのである。それは物の怪の手先となじられた村での悲しい日々を思い出させた。
「それに、わしが知りたいのはこの文言の意味だ。何やら大事なことが記されているような気がしてならぬ。そなたなら解けるだろうと思ったのだが……」
夫の横顔には深くやつれが刻まれていた。

このところの宮廷内の不穏な動きは、夫の挙動からもひしひしと伝わってきていた。玄宗の寵愛を一身に受けた貴妃の一族は、元々博打好きの半端者だった御史中丞の楊国忠を初め、皆高官に任ぜられ、権勢をほしいままにしていた。そんな一族にとってなんとも目障りなのが腐敗の一掃を掲げる中書令だった。その意見はいまや唐朝を動かすほどの力を備えつつあった。これを怖れた楊一族は虎視耽耽と失脚の機会をうかがっていたのである。

李宗はこうした策謀に対抗すべく、密かに同士と語らい、血染めの連判状も交わしていた。事態はすでに、穏健派の李宗が立たねばならないまでに切迫していたのである。

だが、あの奸智にたけた男が暗躍しているとなれば油断はならない。王氏は夫の行末を案じずにはおれなかった。

◇

「先日の後宮でのはたらき、李宗より詳しく聞いたが、あの貴妃様相手によく辛抱されたな」
数日後、王氏は中書令宅に招かれてねぎらいの言葉をかけられた。
「もったいないお言葉……」
「ひさしぶりに成った王氏の余慶、ぜひとも拝見したいものじゃ」
そういって玄齢は深い目でまっすぐに見た。王氏は心の動揺を見透かされたような気がして思わず目を伏せた。
王氏にとってこの度の仕儀は決して満足のいくものではなかった。
鬼神の力など借りずとも、今の技量をもってすれば必ずよい結果をえられる。それが過信であったと悟ったのは機台に向かったときだった。杼を操りながら、服の下を冷たい汗が流れるのを止められなかった。織り手の名声に目がくらんだ者ならいざ知らず、具眼の士であればたちまち不出来を見抜いたことだろう。

「このたびの出来にはあまり自信がございません……」
「貴妃様にはいたくお喜びであったというが、名人上手ともなれば、傍からは伺い知れぬ思いもあるのだろう」
玄齢の暖かい言葉にひかれて、王氏は今日まで機会のなかった問いを口にした。
「じつは、以前お伺いした機織先生のことでございますが、今は、どちらにおいででしょうか」
「さてさて、わしも久しくお会いしておらん。何せ気まぐれなお方でな。忘れた頃にふらりとあらわれては、また、雲のように去っていく。居所も定まらん」
「先生の織り技とは、どのような技なのでしょうか」
「わしもこの目で見たわけではないが、天地の気象を読み、万物の理法を明らかにするとか。そなたの技を目にして、これほどの技量を授けたのは機織先生

その人しかおるまいと思ったのじゃ」
「先生は中条山に入って修行なさったとか。里に妻やお子はおられたのでしょうか」
「おられたようだが、すべてを捨てて山にはいったと聞いておる」
「お子は娘だったのでしょうか、それとも……」
「さあて、それはわからぬが」
玄齢は王氏のあまりに真剣な様子に怪訝な表情になった。
「いえ、その、瓜の坊様にもそのような話を伺った覚えがございますので……もし、中書令様の仰るように瓜の坊様が機織先生の仮のお姿だったとしたら、ぜひ、お目にかかって御礼など申しあげたいと思いまして……」
王氏はあわてて取り繕った。
丹精した庭の牡丹などを話題にしばし歓談していると、玄齢がふと何かを思

い出したように二、三度うなずいた。
「ところで、生き別れになったそなたのお父上のことだが、たしか機の名手だったそうだな」
「はい。そのように伺っております」
「機織先生はおよそ機のことなら知らぬことはない。父上の消息についても何か知っておられるかもしれん。今の季節は中条山にお戻りかもしれぬので、調べさせてみよう」
「政務ご多忙な折、そのようなことでお手を煩わせるのは・・・・・」
「ははは、気にせずともよい。これも年寄りのおせっかいじゃ」
玄齢は長い時間をさいて王氏と歓談した。実の娘を見るような慈愛のまなざしに包まれ、王氏は日ごろの心労を忘れることができた。退出の際には、主人みずから名残惜しげに門の外まで見送りに出てきた。

「わしの力が足りぬばかりに、李宗にもそなたにも苦労をかけておる。だが、わしはこれまでどおり政務に全霊をつくすつもりじゃ。そなたも案ずることなく夫に尽くし、ますます機に励むがよい」

◇

貴妃に綾を献上してから十日余りして、その織り技のせいでまたしても新たな難儀が生じた。

待望の綾を得た貴妃は宮女たちに披露すべく、玄宗陛下のご来臨を仰いで盛大な花見の宴を催した。その席上、貴妃はようやく手に入れた王氏の綾を得意げに披露した。

「さあ陛下、これをとくとご覧なさいませ」

「いや、これはまた、なんと艶やかな。さすが王氏の手。余人にはとうてい成しえまい」

献上の綾を別の愛妾に授けた後ろめたさも手伝って、玄宗は貴妃の綾を褒めそやした。
「いかがでございますか、梅妃様、これほどの綾が天下にまたとありましょうか」
貴妃は得意満面でかたわらに座る美女を振り返った。
梅の花にも似て清楚可憐なこの女性こそ、先に綾を下賜された梅妃である。貴妃が召し出されるまでは玄宗の寵愛を一身に受けていたこともあって、貴妃が後宮でもっとも恐れる相手だった。
「これは、たしかによう織られております。とは申せ、わたくしが陛下から拝領した綾には遠く及びますまい」
梅妃は手に取りもせずに言い切った。今日こそは宿敵を辱めて日ごろの鬱憤を晴らしてやろう。そう意気込んでいたところへ軽くあしらわれたため、貴妃

は逆上した。みるみる柳眉を逆立てると、
「この綾が梅妃様のものに劣ると申されますか。そのような言い条、わらわはとうてい承服できかねます」
「王氏の綾は美しいばかりでなく、その霊力によって万民に福をもたらすとか。この綾からはそのような徳を感じることができません」
「わかりました。梅妃様がそれほどまでにおっしゃるのなら、この場で二つを比べてみることにいたしましょう」
貴妃は梅妃を睨みつけて言い放った。
このやりとりをハラハラしながら見守っていた側近たちは、どちらが勝っても傷つくと懸命に引き止めた。しかしながら後宮の勢力を二分する同士であれば、互いに後には引けなかった。気弱な玄宗も愛妾たちの意地と剣幕に割って入ることができなかった。

まもなく王氏が織った二匹の綾が台の上に並べられた。
貴妃は当然、自分の綾が優るものと信じていたが、並べてみれば優劣は自ずと明らかだった。単独で眺めていたときはあれほど輝いて見えたおのれの綾が、梅妃の綾の前ではまるで精彩がなく、色褪せて見えたのである。
「いや、これは引き分けじゃ。引き分けじゃ。もとよりどちらも王氏の手ではないか。優劣などと、ばかげておるぞ」
玄宗は懸命にとりなそうとしたが、万座で恥をかかされた貴妃は烈火のごとく怒り、そのまま退席してしまった。
部屋に引き籠った貴妃は、王氏はわざと劣った綾を織ってわらわに恥をかかせたにちがいない、あの女を呼べと側近にあたりちらして、その怒りは終日おさまらなかったという。

◇

王氏が貴妃の命でふたたび後宮に上がったのは、それから二日後のことだった。貴妃からの叱責はもとより覚悟のうえだった。

「お待たせいたしました、李夫人」

雲帳の陰からあらわれたのは先日、後宮に上がったおりに見かけた老宮女だった。たしか名を陳氏といった。その横顔はかすかに見覚えがあるような気がしたが、誰かは思い出せなかった。

「貴妃様には、それはひどいお怒りようでしたが、今はだいぶお心も鎮まられたご様子です。つきましては、本日は王氏殿にじきじき申し渡したいことがおありとのこと」

陳氏に導かれて御殿の一間に通されると、椅子にすわった貴妃がまっすぐに見下ろしていた。その頬は紅潮し、感情を懸命におさえているように見えた。まだ、怒りが解けないのかと案じながら、王氏はひざまずいて平頭した。

「よき綾をいただけるという約束は嘘でしたか」
「めっそうもございません。ただただ、わたくしが至りませんでした。次は必ずよい布を献上させていただきます」
「再度の機会を与えよと申すのか」
貴妃は王氏の顔をしばし見下ろしていたが、やがて大きくうなずいた。
「わかりました。先日の裏切りは許しがたいとはいえ、わらわはそなたの腕を惜しみます。格別の計らいをもって再度の機会を与えることにいたしましょう。こころして励み、向こう二十日の内に必ず天下第一の綾を仕上げなさい」
伝えおわると、貴妃は宮女たちに退がるよう命じた。広い部屋には貴妃と陳氏、そして王氏だけが残された。
「もそっと近くへ」
貴妃はあの夜のように王氏を近くに呼び寄せると、唐突にこう切り出した。

「王氏の余慶は閨房の術にも役立つものですか」
王氏は問いの意味がわからず目を伏せたまま黙っていた。
「そなた、閨房の営みにおのれの綾を使って、夫を喜ばせたことはありませぬか」
あけすけな問いに王氏はますます返事に詰まった。
「陛下には、このところ梅の精へのお通いが続いておられるとか。よほどのことがなければ、今更、陛下のお心が動くはずがありません」
後宮に上がってからこの方、貴妃はおのれの魅力に揺ぎない自信を抱いてきた。陛下のご寵愛はすべて、天下第一の美女たるこの楊太真に注がれている、と。それだけに玄宗が梅妃のもとに通っているという報告はにわかに信じがたいものだった。
梅妃といえば、先妻の武恵妃時代からの妃嬪。いわば昔の女ではないか。そ

んな女にわたしが負けるはずがない。
　しかし宦官を使って密かに調べさせたところそれは事実だった。貴妃はにわかに自信が揺らぐのを憶えた。もともと漫々たる自信の底には、おのれにはない魅力を備えた梅妃への恐れが隠されていたのである。これほど王氏の綾をほしがり、玄宗との愛の行末を知りたがったのもそのゆえだった。
「この陳氏が聞きだしたところでは、陛下のお通いの陰にはそなたの綾の力があるとか」
　貴妃はかたわらに控えている陳氏を振り向いた。陳氏は一歩前に出ると、
「おそれ多いことですが、梅妃様には一糸まとわぬ上にかの綾を巻いて、陛下と歓びのかぎりを尽くされているとか」
「でなければ、わらわの閨の技が劣るなどということがありえましょうか」
　自分の綾に男女を結び合わせる力があることは王氏もうすうす感じていた。

わたしと李宗様もそのご縁ではなかったのか。でも、男女の営みそのものに効果があるなど考えたこともなかった。
「もう一度聞くが、そなたの綾は閨房の術にも効くのですか」
「わたくしの手を放れた綾が、何か力をあらわすという噂は聞いておりますが、それが……どのような力かはぞんじません」
王氏は顔を赤らめながら答えた。
「では、やはり効能があるのですね」
王氏はなおも綾の力にすがろうとする貴妃に、後宮の女としての業を感じた。
「そなたの機をめぐっては、よからぬ噂もあるようです。ですが、そのようなことはどうでもよい。毒だというのなら、その毒を皿ごと食べてみせましょう。わらわがほしいのは綾の力だけ。よいな、毒をおそれて力を惜しむようなことがあってはなりませぬぞ」

貴妃の厳命に王氏はおのれが置かれた窮地を悟った。よき綾をなそうと、存分に技を使えば、また何か怪異な現象が起こるにちがいない。そうなればあの姦佞な義玄の思うまま。だが、技を惜しめば王氏の余慶はならず、今度こそ貴妃様もお許しくださらないだろう。害は夫にも及ぶ。

それより、わたしは本来の技を取り戻すことができるのだろうか。

屋敷にもどってからも思い悩むばかりで、王氏は機に向かう気力がどうしても湧かなかった。数日が虚しく過ぎた頃、夫がいつになく憔悴した様子で帰宅した。

「中書令の罷免が上奏された。なんたることだ！」

肩を振るわせながらこう絞り出すと、膝を屈し、こぶしで床をたたいて悲憤慷慨した。

この日の夕方、李宗は数人の同士と連れだってひそかに玄齢邸に上がった。

そこで直接罷免の話を聞かされたのである。
理由は子飼いの道士に命じて、府内に楊一族呪詛の張り紙をしたというものだった。捏造は明らかだったが、背後には寵愛第一の貴妃と、その威勢をたてに宮廷を壟断する一族の意志が働いているだけに、抵抗するのは容易ではなかった。
憤った同士たちはこれを機に訣起すべしと玄齢に迫った。李宗も思いは一つだったが、軽挙妄動はならぬと諌められ、やむをえず思いとどまったのだった。
翌日、李宗が出仕したあと、王氏の姿は都のはずれのあばら家内にあった。がらんとした土間をゆっくりと歩いているのはあの崔義玄である。
「中書令様の罷免が上奏された今、すでに大勢は決しました。こののち唐朝のまつりごとはすべて貴妃様の掌で動くことでしょう。いまとなってはそのお慈悲におすがりするほかありません」

「どのようにせよと」
　王氏は相手の顔をまっすぐに見ながらたずねた。義玄は歩みをとめ、薄い唇をかすかにゆがめて答えた。
「このたびの件では嫌疑はあなたにも及んでいます。楊国忠様などは、機の技とは仮の姿、じつは唐朝を覆す呪詛の技にちがいない。例の張り紙も真の犯人は王氏だ、とまでおっしゃられております……」
　この男はやはりわたしの秘密をつかんでいる。あるいはこの男こそが噂を流した張本人なのではないか。感情の読めない細い目を盗み見ながら、王氏は背筋が寒くなるのをおぼえた。
「そんな四面楚歌の中、懸命におかばいになっておられるのが貴妃様です。そのご恩に報いるためにも、今度こそとびきりの綾を仕上げねばなりませんぞ。それに……」

「それに？」
「貴妃様のご不信が解ければ、中書令様の件についてもお口添えをいただけるかと」
「まことですか」
「貴妃様にはもともとあの方を遠ざけるお気持ちはありません」
吏部侍郎は王氏の反応を確かめるように続けた。
「むしろ陛下に対する忠節を高く買っておられます。唐朝の隆盛を願っている点において思いは一つ。あなたの技を求めておられるのも、そのため以外ではありません。ただし、それもこれも、すべてはあなたの心がけしだい」
話し終えると、義玄は妙な笑みを浮かべながら、王氏の前をゆっくりと歩きだした。そして行きつ戻りつしながら、時折、値踏みするような視線を送った。
「それにしても、これほどの技をもち、美貌も後宮の美女に劣らぬ麗人をこの

まま俗塵にまみれさせてしまうのはなんとしても惜しい。望めば、美人才人はおろか、四夫人の位さえも夢ではないものを。いや、綾の力で陛下をお歓ばせすれば、貴妃の座すらあながち夢ではありますまい」

義玄の言葉に王氏は気色ばんだ。

「わたくしは夫ある身。いかに吏部侍郎様とはいえ、無礼でございましょう」

佞臣は王氏の怒りをさらりとかわして、

「いや、失礼いたした。だが、これはわたし一人の意見ではありません。口さがない宮女たちも皆そのように。それに、いらぬ節介もすべては貴方のため。後宮にあがって陛下のご寵愛を賜れば、吏君の出世もまた思いのまま・・・・・」

と言いつつ、義玄は背後から王氏にすっと身を寄せてきた。と思うと不意にその手をとってぐいと引き寄せた。あわてて払い除けようとしたが、とたんにからだが痺れたように動かなくなった。

「何をなさいます！」
「すべては李君のおためですぞ」
なおも引き寄せられ、両腕で抱きすくめられかけた。
と、そのときだった。暴漢の口から「うわっ！」という叫びが漏れたかと思うと、たちまち麻痺が消えた。王氏はすかさずふりほどいて部屋の隅に逃げこんだ。
見れば、どこから飛来したのか、一枚の紙が義玄の顔に張り付いている。あわててはぎ取ろうとする悪漢の手を生き物のようにすり抜けたかと思うと、高く舞い上がってたちまち虚空に消えた。
「いずこの道士ぞ！」
義玄は腰の剣に手をかけ、紙の消えたあたりを睨みつけた。なおも油断なく辺りを窺っていたが、王氏の視線に気づくとあわてて居住まいをただした。

「この件についてはまた日を改めます。いずれにせよ綾の仕上げは早急に。よいですな」

◇

翌日の午後、王氏は幼な子を寝かしつけながら、昨日の出来事を反芻していた。

口振りからして、あの男が綾の秘密に勘づいているのは疑いえない。若い頃には道士の修行も積んだとか、以前、耳にしたことがある。その折に機の技についても知ったのだろうか。

不意に庭先で何かが動いた。はっとして起き上がると影はたちまち窓辺にあった。

「何者！」

すばやく息子を抱きかかえて身構えると、答の代わりに長い首がにゅうっと

突き出された。首の先には懐かしいあの瓜の顔が。
「瓜の坊様……」
「今は西方道士と名乗っておる。まあ名などどうでもよい」
それは惨めな境遇にあえぐ少女に救いの手を差し延べ、忽然と姿を消したあの瓜坊主だった。あれ以来、今日まで、王氏はその恩を片時も忘れたことはなかった。思いがけぬ再会に、王氏は溢れる涙をぬぐいもせず庭に走り出た。
「久しいな。はや五年になるか」
「やはりあの張り紙の主は坊様でしたか」
「さあて、なんのことやら」
長い顎をつるっとなぜた坊主は、山寺でよく見せた愛嬌のある表情になった。
「宮廷内に中書令様罷免の動きがあるとか。何とぞ坊様の仙力でお救いください」

王氏は瓜坊主の足もとにひれ伏した。
「わしも中書令殿のお力になりたいが、一国の命運を前に道士の術などたかが知れておる。第一、わしの機は占うばかりで、現世を動かす力などもたぬ。できるとすればそなたの機じゃ」
瓜坊主は黒い珠のような目で王氏をのぞきこんだ。
「わたしの機が？」
「そなたがどのような物語を織り残しているか、わしにもわからん。だが、どうやら時は満ちたようだ。それを告げにきたのだ」
「わたしはもはや文字の読み方も忘れました」
「忘れたというのなら、あの杼に聞けばよいではないか」
瓜坊主はそう言ってにやりと笑った。
「あの杼とは？」

「なんだ、まだ受け取っておらぬのか……。まあ、よい。機のおしえを思い出すのだ、王氏。読まずに織れ、ただひたすら織るのだ」
王氏の胸に師の言葉が染みた。
「どうか、お上がりくださいませ。夫もお会いいたしたいはず」
「いや、今はそのいとまはない。ただ、あの崔義玄には用心するがよい。生来の野心家に加えて、真似事とはいえ道士譲りの技も使うからな」
あばら家での一件を思い出して、王氏ははっと胸をつかれた。
「昨日はあやういところを……」
「いや、なに、そなたの機に比べれば、やつの術など児戯にひとしい。あのときはそなたの心の乱れに乗じたにすぎぬ」
瓜坊主は庭の花に顔を近づけると、
「よく丹精しておるな。玄麗殿の薫陶か」

その言葉で王氏は中書令宅の一件を思いだした。
「坊様はもしや、中条山にお住いの機織先生ではございませんか」
「わしはすでに西方道士と名乗ったはずだが。して、機織先生だとしたらなんとする」
「機織先生は機のことなら何でもお分かりとのこと。わたくしの父は機の技を求めて諸国を巡っていたとか。父の消息を何かごぞんじないかと思いまして」
答えるかわりに瓜坊主はこんなことを語り始めた。
「その昔、諸国を巡って機の修行を続けていた男がおったそうだ。しかしどうしても思い通りの機が織れず、悩んだあげく機織先生のもとをたずねた。先生は男の熱心さに打たれ、三年の修行ののち秘伝を授けられたという。その男が確か柳州の出だったとか……」
機の修行、柳州……。坊様の話が真実だとすれば、まさしくその男こそ父

にちがいない。
「その方の名はなんと申されました？」
「さあ、聞いておらんな」
「山を下ったあとはどこへいったのでしょうか」
「故郷に帰ったとか……。さて、わしは城外に一つ約束を残しておる。今しばらくは城内にとどまるつもりだ。またまみえる機会もあろう」
踵を返そうとした師に、王氏が問いかけた。
「坊様はなぜ、あの折、わたしに機を教えて下さったのですか」
「益体もない機を、か。災いのたねの機を、か……。忘れたのか、王氏よ。誰よりもそれを望んでいたのはそなただぞ」
師に諭されて、王氏はあの頃に帰ったような幼い表情になった。
「人にはひとしく使命というものがある。わしはそなたに機をおしえ、そなた

は習った機をきわめる。この使命の前には、何故などという問いは小さいことじゃ」

王氏の喉の奥に、不意にあつい塊がこみあげてきた。それは最初の出会いから長く封印してきたおさえきれぬ思いだった。

「もしや、もしやあなた様はわたしの……」

吐き出そうとするのを、瓜坊主の笑顔がさえぎった。

「ほれ、子供が泣いておるぞ」

はっと振り返った王氏が、再び向き直った時にはすでに師の姿はなかった。

◇

その夜遅く帰宅した李宗は、決意の表情で妻にこう告げた。

「玄麗様の処分は定まった。もはや覆すことはできまい。遠からずわしも謀叛人の汚名を着せられて捕らえられるに相違ない。そうなれば害は一族に及ぶ。

そなたは紅昌をつれて早々に辺境に落ちるがよい」
「あなたさまはどうなさるおつもりですか」
「わしは武官ではないが、国のために命を投げ出す覚悟はできている」
「では、わたしもここにとどまります」
もとより王氏も夫とともに闘う覚悟でいたのである。
「だが、紅昌はまだ幼い。母がなくてこの先どうして生きていく？」
「わたしにはまだ貴妃様との約束が残っております」
「約束と？　そなた、あの肥妃との約束になぜそれほどこだわるのか」
李宗は妻の顔を不思議そうに見返した。
「女の闘いだからでございます」
「女の闘い？」
「はい。貴妃様の陛下への思いと、わたしの……」

そこまで言ってから、王氏は一度言葉を飲み込んだ。
「・・・・・機への思いのどちらが勝るか。その闘いでございます。それに逃げるのなら、親子別々のほうが気づかれますまい」
その夜遅く、宮廷の使者が密かに李家を訪れた。口上の内容は昨日の義玄の言葉と寸分たがわなかった。綾を仕上げたうえで、夫婦ともども恭順の意を示せば、李宗に咎めはなく、その余のことも一切不問に付す、と。
聞き終えると、李宗はひとこと「奸臣、楊一族に仕えるつもりはない」と言い放った。
「わかった。左様お伝え申そう」
「お待ち下さい！」
席を蹴ろうとする使者を引き留めたのは王氏だった。
「わたくしは貴妃様より、一刻も早く綾を仕上げよとの命をいただいておりま

す。もし、夫が捕らえられるようなことがあれば、わたくしはこの壁に頭を打ち付けて死にます。それでは貴妃様とのお約束を果たせぬことになりますまいか」

使者は驚いたように王氏の顔を見つめていたが、やがて大きく首を縦に振り、「それもあわせてお伝え申す」と答えた。

「そなたの技がなければ、あの肥妃がわしの命を救おうなどとは決して思うまいな」

使者が立ち去ると、李宗はこう言って笑った。

妻の説得をあきらめた中書侍郎は、家人を集めると、それぞれに財産を分け与えて暇を出した。皆、涙ながらに最後まで供をと懇願したが、李宗はやさしく諭しながら名残を惜しんだ。

最後に李家では一番の古株で、夫婦の信頼も篤い老夫婦が残った。

「綾を仕上げたら、追って必ずまいります。そなたたちの道中はこの綾がかならず守ってくれるでしょう」
王氏は秘蔵の綾で幼子をくるみ、何度も抱きしめたあと夫婦に託した。
「わたしにもしものことがあれば、この綾をわたしと思って強く生きるように諭してください」

◇

翌朝、李宗の家の周りをひそかに数十の兵が取り囲んだ。王氏の技をおそれたのか、李宗の弓をおそれたのか。いずれにせよ、尋常でないものものしさに奸賊どもの恐怖がよくあらわれていた。
この日、夫婦は朝から一歩も外に出ず、夫は楊一族の専横を訴える檄文をしたため、妻は身の回りの片づけものなどをして時を過ごした。
昼過ぎ、李宗は王氏に酒の支度をさせると、二人だけの酒宴を催した。張家

での出会いからこれまでの思い出をこもごも語らったあと、酔いの回った李宗は愛用の琵琶を持ち出して、王氏に舞いを一差所望した。

「はい」と答えて、王氏は李宗のために織った綾を取り出し、それを肩にかけた。李宗は弦をつま弾きながら朗々と吟じ始めた。

君を懐ひて秋夜に属す
散歩して涼天に詠ず
山空しくして松子落つ
幽人応に未だ眠らざるべし

余韻嫋々。切々たる調べは塀の外で待機する兵士たちの耳にも届いた。中には李宗の無念を思って涙する者さえあった。

宮廷を警護する武官の中には楊一族や宦官の専横を苦々しく思い、玄齢や李宗に同情的な者も少なくなかったのである。
夫の声に合わせて王氏は花のように優雅に、鳥のように軽やかに舞った。その舞は嫁いでから習い覚えたものだったが、師からは天賦の才があると誉められたものだった。
夫婦はしばし時を忘れて、唄い、舞った。
やがて李宗は静かに琵琶を置くと、
「さて、これにて宴は終わった。あとはそなたの出番だ。もはやぞんぶんに織り上げるがよい」
「とは申せ、綾を仕上げてしまえば、あなたさまに難儀が降りかかることに……」
綾を献上すれば自分の罪は許されても、夫の汚名は拭えるのか。いや、たと

え許されても、夫が敵の情けにすがるような男でないことは、誰より王氏が承知していた。それだけに今の時が惜しかったのである。

「はて、この期に及んで何を迷っておる。それこそがわれら夫婦に課せられた天命ではないか。あの肥妃は、やがて梅妃様も後宮から追い出してしまうにちがいない。だが、それはいずれあの女自身の運命でもある。いかな権勢も、いかな容色も、必ず滅びるときがくると、そなたの機であの女に訓えてやるのだ」

忠臣は宮殿の方角をにらんで厳しく言い捨てた。

「貴妃様も可哀相なお方。あの方がほしいのは陛下のご寵愛だけ。そのほかのことは何も目に入りません。同じ女として、お気持ちがわからぬわけでもありません」

李宗は敵を擁護する妻の顔を不思議そうに見つめていたが、やがて「そうかもしれん」とつぶやいた。

「だが、あの女が唐朝の災いであることに変わりはない。さて、わしはしばし寝むとする。そなたが織り上げるまでの間、この命は保証されておるからな」
そう言って高笑したあと、急にあたりを見回して、
「おおっ、いかん。大事なものを忘れていた」
李宗は筐の中から木箱を取り出した。王氏が開けてみると、中から真新しい杼があらわれた。それは故郷の古寺から瓜坊主が忽然と去ったあと、小屋に置かれていた抒と同じ造りのものだった。
王氏の余慶の麗名を高めるのに一役買ったその機織り道具を、王氏は嫁ぐときに養母に託していった。その後、養母の手で燃やされたと伝え聞き、心を痛めていたのだが、こうしてまた巡り会えようとは。
「先日、中書令宅にうかがった折にあずかったのだが。楊一族への怒りに我を忘れ、すっかり失念していた」

「中書令様からですか」
「いや、以前お訪ねした時に話が出たあの機織り先生だ。その先生がたまたま立ち寄られたのだ。それも伝えていなかったか。まったくなんという……」
李宗は顔を赤くしながら首を振った。
「先生はそなたのこともごぞんじで、王氏の技はすでに仙境に達していると誉めておられたぞ。わしがそなたの夫だと申し上げると、たいそう喜ばれてこれを託された」
王氏はその機織先生こそわが師だと答え、昨日の庭先での一件を打ち明けた。
「そうか。それがわかっておれば、なんとしてもわが家にお招きしたものを……」
「機織先生はほかに何かおっしゃっていませんでしたか」
「いや、何も……」

と答えて、寝所に行きかけた李宗がふと立ち止まった。
「おおっ、そうだ。望みは捨てるなとおっしゃっておられた。いや、わしもまだ望みは捨てておらん。楊一族との戦いはこれからだ」
李宗の決意を聞いた王氏の顔がほころんだ。
「何を笑っておる。決して強がりを言っているわけではないぞ。そなたといると、不思議に死ぬような気がせんのだ」
「はい。ですからわたしも笑っているのです」

◇

その夜遅く、王氏は傍らで寝息を立てる夫を残し、一人機小屋に向かった。
その胸には師から贈られた杼が固く握りしめられていた。
機小屋に入ると、王氏は杼を機台ではなく、かたわらの杼箱の上においた。
その上に窓から射し込む月の光が青く降り注ぐ。

と思う間もなく、光が陰り、彼方で夜の鳥どもがあやしく騒いだ。ちぎれた雲が激しく飛び、不気味な雷鳴が二度、三度と轟いたかと思うと凄まじい落雷が宮廷の屋根を撃った。

「さあ、貴妃様、今こそ織って差し上げましょう。あなた様の物語を」

王氏が前に座るとたちまち機台が踊り出した。天命を知った機にはすでに紙も筆も、いや、抒さえももはや無用だったのである。

台を離れた綾は次々に機小屋を飛び出し、春まだ浅い長安の都を落花のごとく舞った。後宮の壁や柱に張り付くと、とたんに布は紙となり、文様は血染めの文字にかわった。

残りの紙は朝廷を私する宦官や賄賂で私腹を肥やす役人たちの門柱に次々に張りついた。紙にはそれぞれの罪状がこと細かく書き連ねてあった。

こうして機はついに真の物語をつむぎ始めたのである。

張り紙の嵐と、時ならぬ雷鳴に宮廷人は怖れおののき、道士や呪術師をたよって災いを払おうとした。
翌朝、後宮の奥深くには、集めた張り紙の山から一枚一枚取り出してはむさぼるように読む貴妃の姿があった。やがて「不吉な！」とひとこと叫ぶと、読み終えた紙をことごとく破り捨ててしまった。
「何を怖れておいでです」
寝台にうずくまって身を震わせている貴妃の背に、冷やかな声をかけたのは老宮女の陳氏だった。
「このような戯れ言、少しも案ずるには及びません。中書令はすでに処分を受け入れ、楊一族に刃向かう勢力はもはやこの国にはおりません。それより、この急な天変地異こそ王氏の余慶がなったあかし。ただちに綾を召し上げなさいませ」

王氏の余慶と聞いて、貴妃の表情がにわかに輝いた。
「おおっ、すると、昨夜の嵐はむしろ吉兆か・・・・」
「左様でございます。先日の綾は術を惜しんだまがいもの。今度こそ、天下第一の美女にふさわしい綾を得られることでございましょう」
「おおっ、では、早速にも召し上げなさい」
寝台から起き上がった貴妃は活き活きと命じた。それを押しとどめて、
「ただし、よく知恵の働く王氏のこと。出来上がった綾を取引に使う恐れがあります」
「取引とな？」
「はい、中書令や夫の処分撤回の取引きに」
「言うことを聞かねば、綾を渡さぬということですね。なんと生意気な」
綾への思いに歯ぎしりしながら、貴妃は鋭く命じた。

「では、兵を差し向けて、無理にでも取り上げなさい」
「いえ、力ずくはお控えなさいませ」
陳氏は貴妃の思いを見透かしたように冷静に続ける。
「月を曇らせるほどの王氏の技、けっしてあなどれません。それにあの女のこと、無理を通そうとすれば、せっかくの綾を釜戸の灰にいたしかねません」
再び曇る貴妃の表情を計るようにして、陳氏はこう言い足した。
「それにつきましては、わたくしに一計がございます。まずは玄齢の罷免撤回の勅状をご用意なさいませ」
「いえ、それはできません。後宮のものが表向きのことに口を挟むなど」
貴妃の言葉に陳氏は薄い笑みを浮かべた。
「何も本物である必要はありません。これはあくまでも綾を手に入れるための方便。ついでに李宗一味の処分撤回も加えれば、王氏も安心して綾を差し出す

ことでしょう」
「しかし、李宗を赦せば、のちのちわれらの災いとなろう」
「貴妃様には、この後も綾を得たいとはお思いになりませんか」
「もちろん、王氏の余慶ならいくらでも」
「そのためにこそ、李宗は生かしておく必要があるのです」
「おおっ、そうか、そうですね！」
陳氏の言葉に直ちに反応して、貴妃が大声を上げた。
「夫の命と引き換えに綾を織らせるわけですね」
「左様でございます。そうなれば、王氏もこれまでに増して励み、やがては、宮中が極上の綾で埋め尽くされることでしょう。さすれば、貴妃さまと大唐の繁栄は約束されたも同然……」
「ああ、なんという……」

宮廷中が王氏の綾に彩られる様を思い描いて、貴妃が恍惚の表情を浮かべた。
「では、早速、勅状を作らせて」
「それならば、すでにここに」
「なんと手回しの良い」
貴妃は呆れたように陳氏の顔を見つめた。
「したが、これは難しいお役目。万一、偽物と見破られたら大事になりましょう。それでも動じない者でなければ務まりますまい……」
貴妃の言葉に義玄は不敵な笑みで答え、そして意外な名を挙げた。
「劉将軍にお命じなさいませ」
「何、劉将軍と？　いえ、とんでもありません。あの男は中書令の仲間。いわばわれらに楯突くものです」
後宮の主は眉をひそめて吐き捨てた。陳氏はかまわず続ける。

「だからこそおもしろいのでございます。今の将軍ではとうてい楊一族には逆らえますまい。いかに辛い役目でも従うほかありません。そうなれば、ふがいない将の姿に離反する者も出てきましょう」
「万一寝返ったらどういたします」
「その場合は逆賊として成敗するまでのこと。なんとしても利はこちらにございます」
「本当に悪知恵のよく回る宮女ですこと」
貴妃は急に光明が射したような無邪気な笑顔を浮かべた。
「それでなくては貴妃様の御用は務まりませんから」
「言いましたね」

◇

その頃、寝所で目覚めた李宗は妻の姿がないのに気づいた。

「王氏、王氏……」
呼びかけたが、どこからも返事がない。もしやと思い朝靄の中を機小屋に向かうと、戸の前に妻が立っていた。青ざめた顔には疲労の色が濃く、立っているのがやっと、という有様だった。
「王氏、いかがいたした？」
「綾がなりました」
そう言って妻は手に捧げ持っていた綾を夫に示した。手に取るや李宗は感嘆の声をあげた。
「そなたの綾は数多く見てきたが、これほどのものは初めてぞ」
「もうじき宮廷からのご使者がお見えになります。これをお渡しすれば、貴妃様もきっとご満足なさると思います」
「それでよいのか」

「はい。いずれ、貴妃様もこの綾が紡ぎ出した物語を知ることになりましょう」
夫の問いに王氏はきっぱりと返し、それから、
「綾を渡せば追って兵士どもがわたしどもを捕えにまいります。でも、ご心配なく。何があろうとも、あなた様はわたくしがお守りいたしますから」
「何を言う。それはわしの役目だ」
李宗が笑って言うと、王氏の顔にはじめてかすかな笑みが浮かんだ。
「わたしは機小屋で少し休ませていただきます」
「いや、寝所でゆっくりとやすむがよい」
気づかう夫に、「まだ、片づけなどございますので」と言い残して妻はふたたび機小屋の中に消えた。李宗はそのはかなげな後ろ姿をぼうぜんと見送った。
王氏の言葉通り、ほどなくして密命を帯びた劉将軍が単身、李家を訪れた。将軍の武勇はつとに知られていたが、念のため、門外には警護の兵士どもが張

りつめた面もちで待機していた。
李宗が正装であらわれると、将軍は持参した勅状を掲げた。
「陛下の命により、中書令様の罷免は撤回されました。李宗殿以下の処分も取り消されました。もはや何も案ずることはありません。どうか安心して、綾をお引き渡しください」
「もとよりそのつもりでおりました」
奥に引き返した李宗が戻ると、その手には純白の綾が載っていた。
将軍は織物を床に広げると、すみずみまで食い入るように眺めていた。やがて、その表情にはこの場にはふさわしくない陶酔の色が浮かんだ。どれほどの時がたっただろうか、将軍はふとわれに帰ると、李宗に向かって深々と頭を下げた。
「なんたる不思議、なんたる霊妙。こうして眺めている間、わが心は桃仙深く

遊び、あやうく浮き世を忘れるところだった。これぞまさしく名高い王氏の余慶とお見受けした。ありがたい。これでお役目を果たせる」

それから将軍は「こんなもの」と言いながら、偽の勅状をビリビリと引き裂いた。

「われら一同、もとより中書令様のご無念はよく存じあげておる。しかしながら、この期におよんでまだ決起することあたわず、まことにふがいない限り。李宗殿にはどうか御自愛なされて、時をお待ちください。綾がなった今、よもや貴妃もあなた方を粗略に扱うことはあるまい」

「ご配慮かたじけなく存じます。辛いお役目。お察し申しあげます」

「李宗殿に同情されるとは。わしもやきがまわったものだ」

役目を終えた解放感からか、将軍の顔にいつもの快活な笑みがもどった。

「ところで王氏殿はいかがなされました。お目にかかってひとこと御礼など申

し上げたいが」
「妻ならば、昨夜のはたらきで精魂を使い果たし、今は寝所で休んでおります」
将軍は李宗の言葉にうなずいた。
「まだ語りたいことは多いが、今はお役目を果たすにしくはない。また必ず戻ってまいります」
綾を抱えて退出しようとした将軍は、ふと立ち止まってこう言い足した。
「お子は無事、城外に出られたと配下の者より報告がありましたぞ」

「おおっ、待ちかねましたぞ」
宮女の手から奪うように綾を引き取った貴妃は、その織物をしばし愛しげに胸に抱きしめていた。次いで、机の上に広げてしげしげと眺めはじめた。
「ああ、なんという」

貴妃は遂に手に入れた至極の織物にほおずりし、顔をうずめた。そして、ため息まじりに同じ言葉を繰り返した。
「では、早速にも帯に仕立てさせましょう」
宮女が声をかけると、貴妃は顔をあげてきっぱり制した。
「いえ、当分はこのままに。あの女との綾比べが先決ですから」
思いがけない屈辱を味合わされた先日の出来事は、貴妃の胸にまだ生々しく残っていた。昨夜の怪異が王氏の余慶が成った証だったとすれば、今度こそ負けるはずがない。その口もとにはおさえ切れぬ笑みがこぼれた。
「おお、そうじゃ、陳氏は、陳氏はどこです。早速、褒美を取らせねば」
「陳氏殿なら、先ほどまでおられましたが・・・・・」
「あの悪女は肝心なときにいつもいないのですから。まあ、よい。今宵は祝いの宴にいたしましょう。楽師を呼びなさい」

貴妃はうきうきと宮女に命じると、宴を待てないとでもいうように綾の周りで踊り出した。貴妃の舞いの巧みさは後宮に上がる前から聞こえていた。玄宗もこれを深く愛で、宴の折には自ら絃を奏でて楽しむことも多かった。ようやく得た至宝を胸に、その舞いは天女の舞のごとくどこまでも軽やかだった。

◇

貴妃が能天気に舞に打ち興じている頃、李宗の屋敷を囲んでいた兵士たちがいっせいに動き出した。

このとき李宗は戦装束に身を固め、最後の書き物などをしていたが、外の気配を察すると、「王氏、王氏……」と呼びながら機小屋に向かった。踏み込んだ李宗が見たのは、床に倒れ伏す妻の姿だった。

「王氏！」

懸命に抱き起こしたが、その顔にはすでに死相が現れ、からだの温もりも失

われていた。
「今朝の姿があれほど儚げに見えたのは、機織りの疲ればかりではあるまいと思ったが、ああ……」
李宗は妻の遺骸をかき抱くと、天を仰いで号泣した。
「逆賊李宗、陛下の命によりを召し捕りに参った。神妙に縛に就け」
討伐の指揮をとる警護隊長の大音声が門外から届いた。
李宗は機台の脇にあった織りかけの布をとって遺骸にかけた。それから木箱の上の杼に気づいて妻の両手に握らせた。
「見ておれ、王氏。この弓がそなたの機に負けぬ働きをするところを、な」
言い残すと、李宗は愛用の強弓を小脇に門の屋根に駈け登った。
「逆賊とは片腹いたい。宦官どもと結んで朝廷を私する楊一族こそ真の逆賊と知れ」

李宗は屋根の上に仁王立ちになった。
「問答無用、かかれー！」
隊長の命令一下、兵士たちは門の屋根に梯子をかけ、敵めがけて殺到した。
「殺すな。生け捕りにせよ！」
と、その時だった。雷鳴が轟いたかと思うと、突然、空が夜のように暗くなった。ついで暗い一点から朱が染みだしてきた。
「おお、あれは」
見上げる兵士の目に映ったのは、静かに舞い降りてくる無数の赤い布だった。血のように赤い布は舞いながら集まり、渦のように回転したかと思うと、たちまち一つの文字に収斂した。
「秕」
その文字が四散したかと思うと集まり、また新しい文字となった。

「政」
「百」
「出」
「天」
「下」
「騒」
「擾」
兵士たちは立ちすくんだまま、なすすべを知らない。最後に布は巨大な柱となって李宗をすっぽりと蔽ってしまった。まるで主を敵の手から守ろうとするかのように。
「ええい、ひるむな。目くらましだ。ひるむな」
隊長の声に励まされた兵士たちは、巨大な布めがけて突撃した。だが体が布

に触れるやたちまち発火し、火だるまになって屋根から転げ落ちた。その火が布に移り、柱はたちまち炎の柱に変わった。

「射て、射てい！」

狼狽の余り生け捕りの命を忘れた隊長が叫んだ刹那、炎の中から一本の矢がまっすぐ飛び出してきた。矢は先頭の兵士の眉間に突きささり、これを転倒させた。つぎつぎと飛び出す矢はいずれも急所を正確に射抜いていった。隊列はたちまち乱れた。

混乱する兵士たちを縫って一人の道士が、前列に躍り出た。

「王氏！」と、道士は宙に向かって鋭く呼んだ。

「機織道奥義、火布の陣、しかと見とどけたぞ」

「瓜の坊さま……」

どこからともなく唸りのような、風のような声が返ってきた。

「貴方様のおしえにしたがってよい布を織れば、このみじめな境遇から抜け出せる。その一念でわたしは機に向かいました。そして望みは思いがけず早くかなえられました……」

このとき天から突風が吹きつけ、火勢はいちだんと強まった。

「それは父も母も失った身には、もったいないほどの幸せでした。でも、間もなくわたしは織れなくなりました。機によってえたものは機によって失われる。そのことに気づいて、機に向かうのが恐ろしくなったのです」

「おおっ、火が……」

「あやういぞ」

この時、屋根からの飛び火で、母屋からも火の手が上がりはじめた。兵士は矢と火の粉に煽られてじりじりと後退する。

「でも、今こそわかりました。なぜ、わずかな修練で、あれほどの技を習得で

きたのか、覚えた技をなぜ忘れたのか……。あの日からわたしは長いまじないをかけられていたのですね。すべては坊様の描かれた物語だったのですね。よき夫を得たことも、あの夢のようなおだやかな日々も、このたびの中書令様の失脚さえも……」

「いや、そうではない。機のおしえなのだ。わしもまたそのおしえにしたがったまでだ」

「何も恨んではおりません。機をならったことも後悔しておりません。でも、わたしにはもう織れないのです……」

「よいのだ、王氏。そなたはもう充分に織った」

「王氏の最後の綾をお見届けください……お父様」

悲痛な声とともに屋敷全体が炎に包まれた。炎はさらに巨大な舌となって周囲の家々を舐めつくそうとした。

「許せ、王氏！」
道士は叫ぶと、屋敷をおおう炎めがけて錫杖を投げつけた。とたんに炎は真っ二つに裂け、その間を一本の矢が通り抜けて李宗の眉間に突き刺さった。
影は一瞬こおりつき、それからどうと仰向けに倒れると、そのまま屋根をころがり落ちていった。
とたんに、市街を焼き尽くすかに見えた猛火は嘘のようにおさまった。炎上したはずの屋敷や周囲の家々も無傷のままだった。
「何をしておる。李宗をさがせ！」
隊長の声に叱咤された兵士たちがいっせいに門内に駆け込んだ。ところが不思議なことに、屋根から落ちたはずの李宗の姿がどこにも見当たらないのである。
「血の跡もないぞ」

「得物の弓も見あたらん」
「奇っ怪な！」
「やはり夫婦ともども物の怪の類であったか」
兵士たちは青ざめながら口々に叫んだ。
「この屋敷には魔物が取り憑いておる」
どこからともなくあらわれた吏部侍郎の言葉に兵士たちは凍りついた。
「李宗は火勢に乗じて逃げたのであろう。ただちに城内を捜索するがよい」
兵士たちが駆け出すのを待って、義玄は機小屋に入ったが、しばらくしてあわてた様子で出てきた。
「何を探しておる、崔義玄、いや後宮の老女陳氏であったか」
どこからともなく現れた男が背後から問いただした。
「機織道士……」

振り返った義玄はうめくようにもらした。
「王氏を求めておるのなら無駄だ。昨夜のうちにすでに亡くなっておる。哀れにも魔境の機技を使い、綾が成るとともに果てたのだ。遺骸はわしが葬った」
「では、李宗を囲った火布の陣も貴様の仕業か！」
義玄は機小屋を背に油断なく身構えた。
「いや、あれは王氏だ。王氏の魂魄がなおこの世に留まって夫を守ろうとしたのだ」
「では、なぜそれを破った。王氏は貴様の弟子であっただろうに」
「わからぬか。王氏のみならず、李宗の魂もすでに幽冥の境にあった。この世に思いがとどまるかぎり、二つながら長安に災いをなすにちがいない」
道士を睨みつけて義玄はにくにくしげに言い放った。
「それがおまえの望みではなかったのか。この国に災いをなし、ついには滅す

ことが、な。おまえが西域の叛乱軍の手先だということぐらい、とうに見抜いておったわ」
「この国を滅ぼす者が誰か、真の国賊が誰か、すべては王氏の機が明かしたはずだ」
　それを聞くと、義玄は肩をふるわせながら、クククッと押し殺した笑いを笑った。
「では、そのためだけに機の技を仕込んだというのか。おのが思いのためだけに、いたいけな娘に魔境の技を……。あわれ王氏よ。師の道具となり、機によって束の間の幸せをつかみながら、最後は師の手で冥界に送られたか」
「およそこの世に不滅ならざるものなし。楊一族の天下も長くは続くまい。唐朝もいずれ同じ運命をたどる。だが、宮城に巣食う奸臣の死場はここと知れ！」
「黙れ！」

顔に朱を昇らせた義玄が道士めがけて鋭い矢を放った。道士が杖を突き出すと、矢はその前でたちまち砕け散った。
「機織道十術の内、杼矢の術か。だが、その程度の技ではわしには通じぬぞ。貴様の道士修行の顛末はわが師から聞いておる。邪な心を見抜かれて破門されたこともな。それだけに仙境と魔境に通じる王氏の技が恐ろしかったのだろう」
「ばかな！　あんな小娘をなぜ怖れる。ただ、貴妃に取り入るための道具になると思っただけだ」
「おのれを偽るな。おまえは王氏の技を誰よりも怖れていた。だからこそ、その技を我が物にしようとしたのだ。哀れな奴め。どこまで我欲に操られれば気がすむのだ」
　そのとき門外でワっと喊声が挙がったかと思うと、バラバラっと兵士が躍り込んできた。

「貴様ら！」
義玄は新しい敵目がけて礫を投げつけた。顔を打たれた兵士がもんどりうつ。振り上げた手が次ぎの獲物を捉えようとした刹那、そのからだが宙に張り付いた。と思うまもなく、見えない手で掴まれたようにぐいと吊り上げられた。
「おのれ、まだおったのか！」
悪漢は足を宙に泳がせながら叫んだ。
「賊臣、思い知れ！」
声とともにその腹を一本の長剣が深々と刺し貫いた。
儀玄は敵の顔を睨みつけながら声にならない叫びを上げ、そのままどんと地に落ちた。駆け寄った兵士がとどめを刺す。
「ひとあし遅れたか」
「おお、劉将軍……」

「李宗殿をお守りしようと駆けつけたのだが、猛火にはばまれ・・・・・」
血塗れた剣を提げたまま将軍は肩を落とした。
「いや、将軍のご厚誼は冥界の二人にも通じたにちがいない」
「長安にはわれらの居場所はもはやなさそうです。わたしはこれから兵とともに辺境に下ります。その地で力を蓄えて再び都にのぼり、唐朝に仇なす奸臣どもを一掃いたしましょう」
その言葉に道士は大きくうなずいた。
「最後に先生に一つだけお伺いしたいことがあります」
将軍は真剣なまなざしを道士に向けた。
「李家の興隆も滅亡も、ともにその原因となったのは王氏の織り技でした。とすれば、王氏の余慶とはなんだったのでしょう。王氏は機の技によって何を得たのでしょうか」

道士は質問に答えず、ただじっと天を仰いでいた。
「王氏が得たのは、その名とは逆に大いなる災いだったと思えてならぬのですが」
「わしにもしかとはわからぬ。だが人の世の幸せを超えた何かであったことは確かだろう。あえていえば運命か。王氏の機はそれを織りだしたのだ」
道士はそのまま二、三歩あゆみ、それからふと振り返って言い足した。
「だが、それはまた機自身の運命であるかもしれぬ」
奸臣が劉将軍の刃に斃れたその頃、折からの西風に乗って城内を漂う一枚の布きれがあった。道士に切り裂かれた綾の切れ端である。
布は高官の屋敷の上にかかると、にわかに速度を減じてその中庭に舞い降りていった。
庭には旅支度を終え、丹精した牡丹に最後の別れを告げる老人の姿があった。

奸計により官位を剥奪され、辺境に流されるかつての中書令張玄齢である。
木立の上を二、三度舞った布は庭を出ようとした玄齢の手にふわりと乗った。
玄齢はけげんな顔で、両手にのせた布をしばし眺めていたが、その表情はじょじょに険しくなり、やがて恐ろしいような形相に変わった。
「今こそ読めたぞ、王氏！」
大唐の行く末を誰より案じる忠臣はそう発したきり、あとはただ肩をふるわせて立ち尽くすばかりだった。

◇

王氏の綾をえて有頂天になっていた楊貴妃を思いがけぬ不幸が襲ったのは李家の惨事が起きたその日だった。その夜、さっそく綾の効能をためすべく、貴妃は玉の肌に綾のみをまとって玄宗を寝室に迎えた。
「いかがでございますか、陛下」

「その綾は・・・・・」
驚く玄宗に貴妃は満面の笑みで答えた。
「今度こそ王氏がよい働きをいたしました。おかげで楊太真は天下随一の綾と巡りあうことができました」
貴妃は両腕にからめた綾をたくみにあやつりながら踊り出した。あでやかな舞姿に玄宗は手を打ってはやし立てた。
「おおっ、これは珍しい仙女の舞じゃ、仙女の舞じゃ・・・・・」
愛妃が目の前で誘うように舞うと、感極まった玄宗はその足にすがりついた。
こうして貴妃と玄宗は羽化登仙、歓喜の一夜を過ごした。
明け方、深い眠りから覚めた玄宗は愛妃の姿が見えないのに気づいた。「貴妃、貴妃」と名を呼びながら寝室をさがしたがどこにも見えない。不安になった皇帝は宮女たちに命じて、宮殿内をくまなくさがさせた。

まもなく回廊の奥に玉の肌をさらして倒れている貴妃が見つかった。そのかたわらには血を吸ったように赤く染まった綾が――。だが、不思議なことに貴妃自身には傷一つなかった。

寝室に運ばれた後宮の主は、その晩から恐ろしいほどの高熱を発した。宮廷の典医が懸命に治療に当たったが、無数の小さな織機が宮殿に押し寄せる夢にうなされ、七日七晩の間熱が引かなかったという。

ようやく病癒えた貴妃は、綾に染み込んだ血の色を洗い流そうとしたが、いくら洗っても消えなかった。またしてもあの女に謀られたと激怒した貴妃は、宮女に命じてそれを焼却してしまった。だが彼女の王氏の綾への執着はこれで収まったわけではない。

李家の屋敷内には他にも、秘蔵の綾があるにちがいない。中にはこのたびのものを上回る逸品もあるかもしれない。なんとしてもそれを手に入れ、今度こ

そあの女にひとあわ吹かせてやるのだ。しかし兵を動員した徹底的な捜索にもかかわらず、一枚の綾も発見できなかった。

貴妃の努力が徒労に終わったと知った長安の人々は、その妄執を笑いながら、王氏の綾は道士とともに山に帰ったのだと噂しあった。

悲劇の朝、一匹の綾に乗って飛ぶ道士と、それに続く李宗夫婦の後に、昇龍のごとく連なる布を見たと断言する者が多かったからである。

かくして綾比べによる復讐こそかなわなかったが、貴妃は玄宗に執拗に迫って間もなく天敵梅妃の追い落としに成功した。こうして後宮の権力を一手に収めた楊貴妃は、文字通り天下第一の美女となり、我が世の春を謳歌するようになったのである。

だが、人の世は儚いもの。その貴妃が馬嵬（ばかい）で殺害されたのは、この事件があってから十年もたたないうちだった。

栄華を誇った貴妃の運命を狂わせたのは節度使の安禄山だった。辺境で勢力をたくわえた安禄山は、玄宗の信任をえて宮廷に勢力を張った。貴妃もまた安禄山の機知を愛した。しかしその寵愛に報いるかわりに野心をふくらませた安禄山は、ついに反旗をひるがえして宮城に攻め上った。世に言う「安史の乱」である。

一説によれば、この時の反乱軍には辺境に下った劉将軍とその兵士たちも加わっていたと伝えられているが、真偽のほどは定かではない。

宮城を追われた玄宗は貴妃やその姉たちと落ち延び、蜀をめざした。その途中、飢えと疲労にさいなまれた兵士たちの憎悪を一身に買ったのが貴妃だった。

あの妖妃こそが今日の災いのもとだ、あれを生かしておいては我らの命さえ危うい。そう言って玄宗に殺害を迫った。玄宗は愛妃への情愛に迷ったが、最後は重用していた宦官に命じ、涙ながらに手にかけさせた。

このとき殺害に使われた布は絹だったとされているが、ある書はこれを、貴妃が梅妃から奪った綾だったと伝えている。傾城の美妃はその最期に臨んで綾の預言を想い出しただろうか。

こうして王氏の余慶をめぐる物語は一つの結末を迎えたわけだが、この話にはさらに後日談がある。

李宗邸の事件からしばらくして、王氏の故郷に張家の主人や村人たちの手でささやかな墓が設けられた。墓の中には遺骸の代わりに、織りかけの綾が葬られた。この綾は何者かが故郷の村に持ち帰ったとされているが、それが誰であったかは伝えられていない。

王氏の墓の隣には夫李宗の墓も建てられ、綾とともに帰った愛用の強弓が葬られた。村では毎年、桃の花の咲く頃に夫婦の遺徳をしのんで祭が開かれるようになり、機織りの上達を願って遠く長安からも人が訪れたという。

墓ができてから十数年後の春、祭の準備にあわただしい村を一人の美しい娘が訪れた。娘は茶屋の主人に案内されて張家の門をくぐった。先代の主の梨君はすでに老いさらばえていたが、まだ存命だった。

「王氏！」

家人に付き添われてあらわれた梨君は、客の顔を見るなりそう呼んだ。すると娘はにっこり笑ってこう答えた。

「娘の紅昌です。おじいさま」

「おお、どうりで。母と瓜二つだ……」

それは長安を逃れ、徐安夫婦の庇護のもとに成長したあの紅昌だった。

家人の案内で墓地に着いた娘は、持参した見事な綾二匹を墓前に捧げた。墓参りが終わると、紅昌はふたたび李家に立ち寄り、老祖父にこう語ったという。

「綾の一つは母が織り、わたしの産着にした綾。もう一つは村人から学んだ技

でわたしが織ったものです。わたしの綾はまだ不出来で、母の技には遠く及びません。でもわたしには覚悟があります。これから中条山にお住まいの機織先生をお訪ねして、かならず母と同じ技を修めるつもりです」

「機織先生というのはあの名高い機織り道士様のことでしょうか」

茶を運んできた李家の娘がたずねた。この娘は梨君の後妻との間に生まれた一人娘で、よく両親に仕えていた。

「はい。母はこの家にお世話になっていたときに、村を訪れた機織先生から機を習ったと申していたそうです」

「機織道士は王氏の父だ！」

話を聞いていた梨君が突然、叫ぶように言うと顔を覆って泣き出した。

梨君が涙ながらに語ったところによれば、王氏をあずかってから数年後、一人の乞食坊主が張家を訪れたという。梨君が戸惑っていると、坊主はおれがわ

からないのかと言って笑った。
以前、都で見た胡人に風貌が似ていたが、わからないと答えると、おれは王申だよといってまた笑った。もしや商売仲間のあの王申かと問うと、そうだと答えた。梨君は道士の修行を積むと姿かたちまで変わってしまうのかと驚いた。
王申の話によれば、村を出て以来、機の技を求めて諸国を巡り、最後に中条山の道士を訪ねた。この道士は胡人から学んだ技を駆使して、見たこともない綾を織り出すという評判だった。
弟子入りを許された王申は三年の修行ののち、機織道の奥義を授けられた。だがそれに飽き足らずさらに技を磨き、ついにはまったく新しい織り技を編み出した。それとともにおのれの使命についても、いささか悟るところがあった。このたびはそれを娘に伝えるために帰ってきたのだ、と。
今日からひと月の間、山寺を住まいとするので、昼に王氏を使いによこして

ほしい。ただ、自分が父だということは絶対に明かすな、と。梨君がなぜかと問うと、機道を極める修業は並大抵ではない。そのためには親子の情すら断たなければならないのだと答えたという。

「わしは父を知らぬ王氏が哀れで、何度も話そうとしたが、道士の言葉には逆らえなかった。生きているかも知れぬ、と伝えるのが精一杯だった。それに分かったところで、父の許しがなければ会うこともできまい。それではかえって不憫だと思ったのだ」

そこまで話すと、梨君は「王氏には可哀相なことをした……」と嗚咽したきり、あとは言葉にならなかったという。

紅昌は梨君の話を涙ながらに聞いていたが、やがて顔を上げ、きっぱりとこう言った。

「母と同様、わたしには父もなく、母もなく、育ての親も先頃相次いで他界し

ました。こののちは機を父とも母とも思い、中条山のおじい様のもとで修行に励むことにいたします。こちらのおじい様もどうかお達者で」

この後、紅昌がどうなったかの記録は残されていない。しかし一説によれば厳しい修行のすえに機道の奥義を会得し、のちに西域にその技を伝えたという。これがペルシヤを通じてフランスに伝えられ、かの国の機械からくり師の手で機械式の織機に発展させられた。織機は発明者の名をとってジャカード織機と名付けられた。

ジャカード織機は一九世紀、チャールズ・バベッジの機械式コンピュータの発明に霊感を与えたことで知られている。紋紙という入力装置を使って、縦糸と横糸を制御し、自動的に模様を織り出す機械の仕組はコンピュータの仕組そのものである。その意味で王氏の技は現代コンピュータのルーツということになる。

とすれば、王氏の余慶とはあるいはそのことだったのだろうか。

©2022　新戸雅章